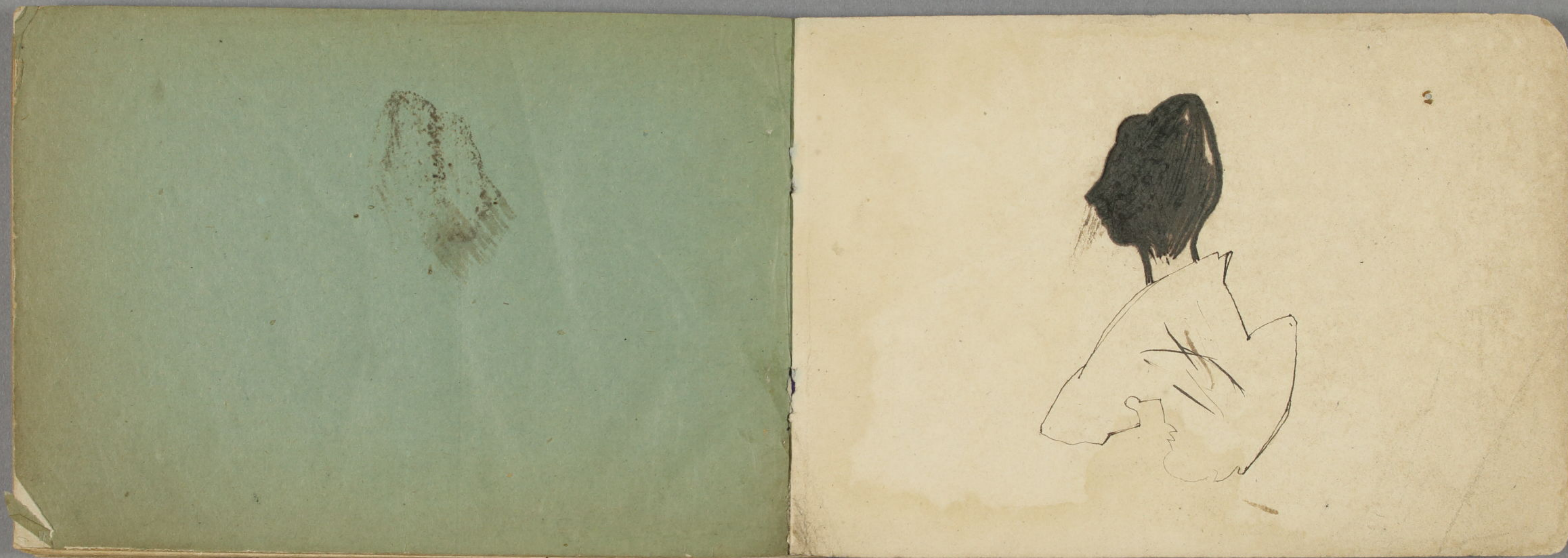


正校。
俳諧七部集





七部集序

さいつ日、ものへまかりけるに、子周道のほ
とに行あふ、此ごろ聞へあはすべき事侍り
て、あなくりもどめつとて、ちひさきふんつ
とみどり出す、これなんはせを葉の、廣く世
ふもて傳へたるなつこのふみにして、此道
を翫へる人の、枕草紙とすべきものながら、
そのまきくさはなれり、たはやすく身に
そへがたかめるを、かくひとつ冊子となし
て風にうそふき雲に詠るの、中だちとせん
とす、そのよしをいさかかはしめしるし
たひてんやといふ、をのれ紙魚てふ虫のす
くせありて、ふるほうと好といへども、いま
たはいかいの道にかくはらす、ひとにした
かいをバによるの篇をこへとまよへそれば
みたりにことくはへん事は、はくかりの關
はくかりなきにしもあらざれど、ひたす
らに、いなのごく原いなみ侍らは、中く博

士めきてもや聞へん、むかし蕭釣は、五經を
 はへのかしらに書て、たなこびの箱に納め、
 いま子周の七部をねつみのあとにききみて
 つねに懐にせんとす、七部は滑稽の七經と
 もいはんか、唐大和そのさかいかはるとい
 へども、其心同しかるへし、はやく櫻木にち
 りはめくて風月のさびをたすけよと云
 警者水母散人吳竹のよつやの里に 志るを

俳校訂七部集

夜雪庵金羅宗匠校閱
 錦花庵三期校正

春の日

曙見むと、人々の戸扣あひて、熱田のかたにゆき
 ぬ、渡し舟さはがしくなりゆく比、并松のかたも見
 へはたりて、いどのとあなり、重五か枝折をける竹
 増ほとちかきにたちより、げさの氣しさをねもひ
 出侍る

二月十八日

春めくや人さまの伊勢参り 荷房
 櫻ちる中馬なかく連 重五
 山がすむ月一時に館立て 雨桐
 鎧ががらの火にあたるなり 李瓜
 しほ風によく聞く聞は鶴あぐ 昌主
 くもりに沖の岩黒く見え 執筆
 須摩寺に汗の帷子脱かへむ 重五
 をのくなみた笛をいたく 荷兮
 女王のはやしにけふも土へりて 李風
 雨の東の角のなき草 雨桐
 肌寒み一度は骨をほとく世に 荷兮
 傾城乳をかくす晨明 昌圭

老翁曰知足之足常足

十

夕かほに雑炊黒き藁屋哉 越人
帯木の微雨とほれて鳴蚊哉 柳雨
はき木はなかわる中に昏にけり 塵交
萱艸は随分暑き花のけふ 荷分
蓮池の深さわする、浮葉哉 同
曉の夏陰茶屋の通きか那 昌圭
夏川の音も宿かる木曾路哉 重五
辟除品の三界無安猶如火宅といへ
る心を

秋

炙家の玉祭

六月の汗ぬくひ居る臺か那 越人
背戸の畑なすひ黄ばみてきりくす 且藁
魂祭はしらに向ふ夕べか那 越人
尸き、てまた一寝入する夜哉 雨桐
雲折く人を休むる月見哉 芭蕉
山寺に米つくほどの月夜哉 越人
瓦ふく家も面白や秋の月 野水
八島とくける屏風の繪を見て 同
具足着た顔のみ多し月見哉 荷分
こぬ殿を唐黍高し見おろさむ 荷分
秋ひとり琴柱はつれて寐ぬ夜哉 舟分
朝顔は末一りに成にけり 杜國
馬はぬれ牛は夕日の村しくれ
芭蕉翁を宿し侍りて

冬

待戀
閑居増戀

藤の實つたふ雪ほつちり 重五
袂より硯をひらき山かけに 芭蕉
飛どりハ典侍の局か内侍か 杜國
三ヶの花鴨尾赤かの鳥いくさ 重五
しらがみいさむ越の獨活菊 荷分

つえをひく事僅に十歩

つゝみかねて月どりをとず鬢かな 杜國
こほりふみ行水のいなつま 重五
齒柔の葉を初狩人の矢に負て 野水
北の御門をあしあけ此はる 芭蕉
馬糞搦あふきに風の打かすみ 荷分
の才士此國にたとりし事を不圖をもひ
出て申侍る

狂句こからしの身は竹齋に似たる哉 芭蕉
たそやどはしるうさの山茶花 野水
有明の主水に酒屋つくらせて 荷分
かしらの露をふるふありむま 重五
朝鮮の梅ろりすきのはひあき 杜國
日のちりくゝに野に米を刈 正平
わらゝほと鷺にやとらすあたりにて 野水
髪はやすまをしのふ身のはと 芭蕉
いつはりのつらしと乳をしりすて 重五
さねぬろとはらすこゝどなく 荷分

十一

我月出よ身はあ本ろなる
 堂ひ衣笛に落花を打拂
 籠興ゆるす木瓜の山あい
 骨を見て坐到泊くみうちかへり
 乞食の蓑をもらふしのめ
 酒のうへに尾を引鯉を拾ひ得て
 御幸に進む水のみくすり
 とにてる年此小角聲の花もろし
 萱屋まはらに炭團つく白
 芥子あまの小坊交りに春むれて
 ある、はすのみ豊てる遺の實
 しつかさに飯臺のうく月の前
 露をくきつね風やかあしき
 釣柿に屋根ふかれたる片庇
 豆腐つくりて母の袁に入
 元政の草の秩も破ぬへし
 伏見木幡の鎧はなをうつ
 いろふかき男猫ひとつを捨ねて
 春のしらすの雪はきをよふ
 水子を秀句の聖わかやかに
 山茶花匂ふ春のこからし
 いぎに見よと難面うしをうつ霰羽
 火にあぶるかれはかの松
 とくさ荷下着に髪をちやせんして

杜 野 芭 荷 野 重 芭 荷 野 重 芭 荷 野 重 芭 荷 野 重
 國 水 蕉 兮 水 五 蕉 兮 水 五 蕉 兮 水 五 蕉 兮 水 五
 羽 野 芭 荷 野 重 芭 荷 野 重 芭 荷 野 重 芭 荷 野 重
 笠 水 蕉 兮 笠 水 蕉 兮 笠 水 蕉 兮 笠 水 蕉 兮 笠 水 蕉 兮

花見

檜木に宮を屋つ壽朝霞 杜國
 銀に恰かはん月豊海 芭蕉
 ひたりに橋をすかす岐阜山 野水

◎ひさこ

江戸の珍碩我はひさこを送れりこれは
 是水漿をもち酒をたしなむ器にもあら
 す或は大樽に造りて江湖をわたれとい
 へるふくへにも異なり吾また後の恵子
 にして用るとをしらすつら／＼のほ
 どりに睡りあやまりて此うち陥る醒
 てみるに日月陽秋きら／＼かにして雪の
 あけ味の闇の郭公もかけたることなく
 ちを吾知人とも見えきたりて皆風雅の
 麗思をいへりしらす是れはいつれのど
 ころにして乾坤の外あるとを出てろの
 ことを云て毎日此内にをどり入

元禄三六月

越智

越人

木もとに汗も鱸も櫻かな 翁
 西日のとかによき天氣なり 珍碩
 旅人の虱かき行春暮て 曲水
 はきも習はぬ太刀の鞘 翁
 月待て假の内裏の司召 碩

度々草をもらはる、なり 碩
 虫は皆つ、れくど鳴やらん 秀
 片足く、の木履たつぬる 碩
 暫文を百もたてたる別路に 秀
 なみたくみけり供の侍 碩
 須摩はまゝ物不自由なる臺所 秀
 狐の恐る弓かりにやる 碩
 月氷る師走の空の銀河 秀
 無理に居たる膳も進まず 碩
 いらぬとて大脇指も打くれて 秀
 獨ある子も矮鶏に替ける 碩
 江戸酒を花さく度に懸しけり 秀
 わいの山彈春の入相 全
 雲雀啼里は屍糞かき散し 碩
 火を吹て居る禪門の祖父 秀
 本堂はまた荒壁のはしら組 碩
 羅綾袂しぼり給ひぬ 秀
 齒を痛む人の姿を繪に書て 碩
 薄雪たはむす、き瘡たり 秀
 藤垣の窓に紙燭を挾をき 碩
 口上果ぬいかさまの時宜 秀
 たふとげに小判よそふる草袴 碩
 秋入初る肥後の隈本 秀
 幾日路も宵て月見る役者船 碩

寸布子ひとつ夜寒やけり 秀
 澤山は冗めくど叱られて 碩
 呼よりけども猫は歸らす 秀
 子規御小人町の雨あがり 碩
 やしほの楓木の芽萌立 秀
 散花に雪踏挽つる音ありて 碩
 北野の馬場にもゆるりけろふ 秀

猿蓑

晋其角序

詠諧の集つくる事古今にたりて此道
 のおもて起べき時なれや幻術の第一と
 してその句に魂の入ざればゆめにゆめ
 ざるに似たるべし久しく世にとまら
 長く人にうつりて不變の變をしらしむ
 五徳はいふに及はず心をこらすべきた
 しなみなり彼西行上人の骨にて人を作
 りたる聲いわれたる笛を吹やうにかん
 侍ると申されける人には成て侍れども
 五の聲のわかれざるは反魂の法のおろ
 そかに侍にやさればたましいの入たら
 はアイウエヲよくひ、きていかならん
 吟聲も出ぬべし只俳諧に魂の入たらむ
 にこそとて我翁行脚のうる伊賀越しけ

る山中にて猿に小蓑を着せて俳諧の神
を入れたまひければたまち断腸か思
叫ひけむあたに懼るへき幻術なりこれ
を元として此集をつくりたて猿みのだ
は名付申されける是が序も^うの心をど
り魂を合せて去來凡兆のほしけあるに
まかせて書

冬

初しくれ猿も小蓑をほしけ也
あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲
時雨きや並ひかぬたる鮎ふね
幾人かしくれかけぬく勢田の橋
鎗持の猶振たつるしくれ哉
廣澤やひとり時雨る、沼太郎
舟人にぬられて乗し時雨かな
なつかしや奈良の隣の一時雨
時雨る、や黒木つむ屋窓あかり
馬がりて竹田の里や行しくれ
たまされし星の光や小夜しくれ
新田に稗殼炕るしくれう那
いそかしや沖の時雨の眞帆片帆
はつ霜に行や北斗の星の前
一いろも動く物なき霜夜哉
はつしもに何とねよるう舟の中

伊賀の境
に入て

淀にて

芭蕉 其角 千那 丈艸 正秀 史邦 尙白 曾良 凡兆 乙州 羽江 昌房 去來 百歳 野水 其角

ならにて

歸花それにもしかん庭切れ
禪寺の 松の 落葉や神無月
百舌鳥のある野中の杭よ十月
こがらしや頬腫病む人の顔
砂よけや蟻のかたへの冬木立
棹鹿のかさなり臥る枯野かを
澁柿をかがめて通る十夜哉
ちやの花やはる、入なき靈聖女
みのむしの茶の花もへに折ける
古寺の冥子も青し冬かまへ

翁の野田に閑居を聞て

雑水のなところならば冬こもり
この寒さ牡丹のはちのまつ裸
晦日も過行うはかいのこ哉
神迎水口 たちか馬の鈴
膳まはり外に物さし赤柏
水無月の水を種にや水仙花
今は世を^まのむけしきや冬の蜂
尾頭のことろもときき海鼠哉
一夜くさむき姿や釣干菜
みちはさに多賀の鳥井の寒さ哉
茶湯どてつめたき日にも稽古哉
炭竈に手負の猪の倒れけり
住つかぬ旅のことろや置火燧

同凡兆 嵐関 芭蕉 凡兆 土芳 越人 猿雖 凡兆 其角 車來 尙白 珍碩 良品 昌房 正秀 及肩 探九 尙白 龜翁 凡兆 芭蕉

草津

霜月朔日

貧交

寝ころやこたつ蒲團のさめぬ内 其角
 門前の小家もあそふ冬至哉 凡兆
 木兎やおもひ切たる晝の面 芥境
 みつづくは眠る所をさ、れけり 半殘
 ましはりは紙子の切を譲りけり 丈艸
 蒲風や巴をくつつすむら千鳥 頁會
 あら磯やはしり馴たる友千鳥 去來
 狼の跡踏消すや濱千鳥 史邦
 背門口の入江にのほる千鳥哉 丈艸
 いつ迄か雪にまふれて鳴千鳥 千那
 矢田の野や蒲のなぐれに鳴千鳥 凡兆
 篋士の見かへる跡や鴛の中 木節
 水底を見て來た貌の小鴨かち 丈艸
 鳥共も寝入てゐるか余吾の海 路通
 死まで操るらあん鷹のかほ 且藁
 襟巻に首引入て冬の月 杉風
 この木戸や鎖のさゝれて冬の月 其角
 からしりの蒲團はかりや冬の旅 暮年
 見やるさる旅人さむし石部山 智月
 翁行脚のふるか衾をあたへらる記あり略之
 首出してはつ雪見はや此衾 竹戸
 題竹戸之衾
 疊めは我手のあとそ紙衾 曾良
 魚のかけ轉のやるせなき氷鼓 探丸

青亞追悼

しのかさと數珠もどはす綱代守 艸丈
 御白砂に候寸
 藤つきにかしこまり居る霞か那 貞邦
 櫻欄の葉の霞に狂ふあらし哉 野童
 鶺鴒の橋よりこほすあられ哉 示蜂
 呼かへす鮒賣見えぬ霞か哉 凡兆
 みぞれ降る音や朝飯の出来る迄 畫好
 はつ雪や内に居さうな人は誰 其角
 初雪に鷹へやのぞく朝朝 吏邦
 霜やけの手を吹てやる雪まろけ 羽江
 わさも子か爪紅粉のこす雪まろけ 探丸
 下京や雪つむ上の夜の雨 凡兆
 なか〜と川一筋や雪の原 同兆
 信濃路を通るに
 雪ちるや穂屋の薄入刈殘し 世蕉
 草菴の留主をどひて
 衰老は簾もあけす菴の雪 其角
 雪の日は竹の子笠うりまさりける 羽笠
 誰とても健かならは雪のたひ 郊七
 ひつかけて行や雪吹のてましこさ 去來
 乳のみ子に世を渡したる師走哉 尙白
 かし雛も空やの瘦も寒の内 芭蕉
 鉢たゞき憐は顔に似ぬものか 乙州
 一月は家に米かせはちたゞき 丈草

夜神樂や鼻息白し面の内 其角
節季候に又のぞむへき事もあし 順珠
家くやかたぢいやしきす 拂 祐甫
乙州か新宅にて

人に家をかあせて家は年忘 芭蕉
弱法師家門ゆるせ餅の札 其角
歳の夜や曾祖父を聞けば小手枕 長和
うす壁の一重は何かどしの宿 去來
くれて行年のまうやけ伊勢くまの 同
大どしや手のをかれたる人こゝろ 羽江
やりくれて又やさむしろ歳の暮 其角
いねくど人にゐはれつ年の暮 路通
年のくれ破ればかまの幾くたり 杉風
有明の面おこすや味とゝきず 其角
夏かすみ曇り行衛や時鳥 木節
野を横に馬引むけよほどゝきず 芭蕉
時鳥けふにかきりて誰もあし 伺白
ほとゝきす何にもあき野々門構 凡兆
ひるまてはさのみいろかす時鳥 智月
蜀魂あくや木の間の角櫓 史那
入相のめゝぎの中やほどゝきす 羽江
ほどゝきす瀧よりかみのわたり哉 丈草
心なき代官殿やほどゝきず 去來
こい死せ我塚となけほどゝきす 奥州

夏

別僧

松島一見の時千鳥もかるや鶴の毛衣と
よめりければ 曾良
松島や鶴に身をかれほどゝきす 芭蕉
うき我をさひしからせよかんこ鳥 芭蕉
旅館庭せまく庭草を見す
若楓茶いろに成も一さかり 曲水
四月八日詣慈母墓
花水にうつしかへたる茂りか那 其角
葉かくれぬ花を牡丹の姿か那 全峯
ちるとききの心やすきよ米露花 越人
智恵のある人には見せしげしの花 珍碩
翁に供られてすまあかしにわたりにて
這出にかひ屋か下の蟾の聲 同
此境はひわたるほどゝいへるもこの事にや
かたつふり角ふりいけよ須摩明石 同
五月雨に家ふり捨てあめくしり 凡兆
ひね麥の味なき空や五月雨 木節
馬士の謂次第なりさつきあめ 史那
奥州名取の郡に入て中將實方の
塚はいづくにやと尋侍れは道
より一里半ばかり左りの方笠嶋
といふ處に有とあしゆふりつゝ
きたる五月雨いとわりなく打過
るに

笠嶋やいつこ五月のぬかり道 芭蕉
大和紀伊のさかひはてなし坂に
て往來の順禮をどゝめて奉加す
いめければ料足つゝみたる紙の
はしに書つけ侍る

つゝくりもはてなし坂や五月雨 去來
髮削や一夜に全晴て五月雨 凡兆
日の遣や焚傾くさ月あめ 芭蕉
籠物や着もせてよこす五月雨 羽江
七十餘考醫みまかりけるに弟子

のころりておくまゝ予にいたみ
の句乞けるるの老醫いまうかりし
時もさらに見しれる人にあらざ
りければ哀にもおもひよらずし
て古來まれなる年にこそといへ
どとかくゆるさゝりければ

六尺も力落しや五月あめ 兵角
百姓も麥に取つく茶摘歌 去來
しがらきや茶山しに行ふ婦つれ 正秀
つがミ合子供のたけや麥島 遊力
麥藁の家してやらん雨 智月
麥出來て鯉迄喰ふ山家 紅
しら川の關越來て 芭蕉
風流のはじめや奥の田植歌 芭蕉

孫を愛して

勢田螢見

病後

饑別

出羽の最上を過て 眉婦を面影うして紅紛の花 法隆寺開帳南無佛の太子を拜す 御袴のはつれなつかし紅粉の花 田の畝の豆つたひ行螢かあ 膳所曲水之樓にて 螢火や吹とはされて鴉のやみ やみの夜や子供泣出す螢舟 やたる見や船頭酔てればつかあ 三熊野へ詣ける時 螢火やこゝろそろしき八鬼尾谷 おながちに鶴とせりあはぬかもめ哉 草むらや百合は中くはなの貌 空つりやかしらふらつく百合の花 す、風や我より先に百合の花 燒蚊辭を作りて 子やなかん其子の母も蚊の喰 立さまや蚊屋もはづさぬ旅の空 うどくなる人につれて 參宮する従者にはあむけして みじか夜を吉次が冠者に名残かな 隙明や蚤の出で行耳の穴 下闇や地虫ながらの蟬の聲 客ふりや居處かゆる蟬の聲	口 千邦 万平 去來 凡兆 芭蕉 里尼 尙白 半殘 何處 乙州 嵐蘭 星東	其角 丈草 嵐雪 探志
---	---	----------------------

頓で死ぬ氣しきは見へず蟬の聲
衷さや青麻刈る露のたま
渡り懸て蕪の花の浮く流かな
舟引の妻の唱歌か合歡の花
白雨や鐘すしはづす日の夕

芭蕉
槐市
凡兆
千邦
史邦

素堂之蓮池邊

白雨や蓮一枚の捨あたま
日焼田や時くつらくきく蛙
日の暑き盥の底の蠟かな
水無月も鼻つきあはす敷寄屋哉
日の岡やこがれて暑き牛の舌
たゝあつし籬によきは髪露
しねんこの藪ふく風うあつかりし
夕かほによはれてつらき暑さかな
春草は湯入なかめんあつさかな

嵐蘭
乙州
凡兆
同秀
正秀
木節
野童
羽江
巴山

千子が身まりけるをさゝてみの國

より去來がもとへ申遣し侍りける
無き人の小袖も今や土用干
水無月や朝めしくはぬ夕す、み
したらくにねれは涼しき夕へかな
すゝしさを朝草門に荷ひ込
唇に墨つく兒れす、みかな
月鉾や兒の額此薄粧
夕くれや帆並びたる雲の峰
夕くれや帆並びたる雲の峰

芭蕉
嵐蘭
宗次
凡兆
千邦
曾良
去來

しねんこの藪ふく風そあつかりし
夕かほによはれてつらき暑さかな
春草は湯入なかめんあつさかな
千子が身まりけるをさゝてみの國
より去來がもとへ申遣し侍りける

野童
羽江
巴山

無き人の小袖も今や土用干
水無月や朝めしくはぬ夕す、み
したらくにねれは涼しき夕へかな
すゝしさを朝草門に荷ひ込
唇に墨つく兒のすゝみかな
月鉾や兒の額の薄粧
夕くれや帆並びたる雲の峯
はじめて浴に入て

芭蕉
嵐蘭
宗次
凡兆
千邦
曾良
去來

雲の峰今のは比叡に似た物か
秋風や蓮をちからに花一つ
此句東武よりきこゆもし素堂か

元道
讀人

かつくりとぬけ初る齒や秋の風
芭蕉葉は何になれどや秋の風
人に似て猿も手を組秋のかせ
加賀の全昌寺に宿す

杉風
路通
珍碩

終夜秋風さくや裏の山
蘆原や鶯の寐ぬ夜を秋の風
あさ露や鬱金鳥の秋の風
はつ露や猪の臥芝の起あがり

曾良
山川
凡兆
去來

大比叡やはこふ野菜の露しけし 野童
 三葉ちりて跡はがれ木や桐の苗 凡兆
 文月や六日も常の夜には似ず 芭蕉
 合歡の木の葉こしひいとへ星のかけ 全
 七夕やあまのいそがはころふへし 杜若
 みやこにも住よしりけ相撲取 去來
 朝かほは露眠る間のさかりかな 風麥
 露やぬかこつの蔓のほとかれず 及肩
 笑にも泣にもにさる木槿かき 嵐蘭
 手を掛ておらて過行木槿哉 杉風
 高燈籠ひるは物うさ柱のち 千那
 はてもちて瀬のなる音や秋霰雨 史那
 そよ／＼や敷の内より初あらし 且黄
 秋風やとても薄はうこくはす 羽子
 迷ひ子の親このろや／＼すき原 江
 八瀬おはらに遊吟して柴うりの文書
 ける序手に

まねき／＼初の先の薄かき 凡兆
 つくしよりのへりけるにひみどいふ山にて
 卯七に別て

君かてもまじる成へしは赤薄 去來
 草刈よそれか思ひか萩の露 李白
 元禄二年翁に共せられてみちのく
 より三越路にう／＼り行脚しけるに

かへへの國にていたはり侍ていせま
 て先達けるとて

いつくにかたふれ臥ども萩の原 曾良
 桐の木にうつら鳴なる躰の内 芭蕉
 百舌鳥をくや入日さし込女松原 凡兆
 初雁に行燈とるなまくらもと 落梧
 病雁の夜さむに落て旅ねかな 芭蕉
 海士の屋は小海老にまじるいと／＼哉 全

加賀の小松と云處多田の神社の寶
 物として寶盛か菊かう草のかふと
 同しく錦のきれ有遠き事なうらま
 のあたり隣におはねて

ひさんやな甲の下のさりくす 芭蕉
 葉畑や二葉の中の虫の聲 尙白
 はたかりや壁に来て鳴夜月と 風麥
 いせにまふてける時

葉月や矢橋に渡る人どめん 千子
 三ヶ月にふかのわたまをかくしけり 之道
 粟稗と目出度なりぬはつ月よ 半殘
 月見せん伏見の城の捨郭 去來
 翁を茅屋に宿して

おもしろう松笠もへよ薄月夜 土芳
 加茂に詣してに涙のかゝる哉と
 かの上人のたなこの

やしろの神垣に取つきてよみしとや
月影や拍手もる、膝の上 史邦
友達の六條にかみそりいたくどて
まかりけるに

影はうしたふさ見送朝月夜 卓袋
はせを葉や打かへし行月の影 乙州
京筑紫去年の月とふ僧中間 丈艸
吹風の相手や空に月一ツ 凡兆
ふりかねてこよいになりぬ月の雨 尙白
向のよき宿も月見る契かな 曾良
元祿二年つるかの港に月を見て

氣比の明神に詣遊行上人の古例をきいて
月清し遊行のもてる砂の上 芭蕉
仲秋の望猶子を葬送して

かゝる夜の月も見にけり野へ送 去來
明月や所は寺の茶の木原 昌房
月見れば人の砧にいそかはし 羽紅
僧正のいもとの小屋の砧かな 尙白
初汐や鳴門の波の飛脚舟 凡兆
一戸や衣もやふる、駒むかへ 去來
稗の穂の馬逃したる景色哉 越人
溢粕や鳥もくはす荒島 正秀
あやまりてさうおさゆる鱸哉 嵐蘭
一鳥不鳴山更幽

柿ぬしや枅はちかきあらし山 去來
白波やゆうつく橋の下紅葉 塵生
肌寒し竹切山の薄もみち 凡兆

神田祭
されはこそひなの拍子のあなる哉 蛇足
神田祭のつゝみうつ音

拍子さへあつまなりとや 鼠雪
花すゝき大名衆をまつり哉 丈草
行秋の四五日よわるすゝき哉 凡兆
立出る秋のゆふへや風はるし 全兆
世の中は鶴鶴の尾の隙もなし 荷兮
盪魚の齒にはさかふや秋の暮

春
梅咲て人の怒の悔もあり 露沾
上臈の山莊にましくけ

るに候し奉りて 去來
梅かゝや山路獵入る犬のまね 句空
梅か香や分入る里は半の角 庭興

梅かゝや砂利敷なかつ谷の奥 土芳
初蝶や骨なき身にも梅の花 半殘
梅か香や酒の通ひの新しき 禪鼠
梅の木や此一すちを踏のたう 其角

野島や鴈追のけて摘若菜 史邦
初市や雪に漕來る若な船 嵐閣
宵の月西に響の聞ゆ也 如行

憶翁之客中

裾折て菜を摘しらん草枕 嵐雪
摘すて踏付かたきわかな哉 路通
七くさや跡にうかる朝からす 其角
我事と鯨の逐し根芹哉 丈草
うすらひやわつかに咲る芹の花 其角
臙とは松の黒さに月夜哉 全
鉢たゝき來ぬ夜とをれば臙也 去來
驚の雪踏おとす垣穗哉 一桐

子良館の後に梅ありといへば

乙子良子の一もとゆかし梅の花 芭蕉
瘦藪や作りたふれの軒の樾 千邦
灰捨て白梅くるむ垣ねかな 凡兆
日當りの梅咲うるや屑牛房 支幽
暗香浮動月黄昏

入相の梅になり込ひいさ哉

武江にかもむく旅亭の殘

夢 乙 荔
寝くるしき窓の細目や闇の梅
辛未の年彌生のはしめつたたよ

しの山に日くれて梅の匂ひし
きりなりければ舊友風窓かみぬ
かたの花や匂ひを案内者といふ
句を日比は古き事のやうにおも
ひ侍れども折にふれて感動身に
しみわたり涙もおどすはかりな
れはその夜の夢に正しくまみぬ
て悦るけしきあり亡人いまだ風
雅を忘れざるや

夢去てまた一句ひ宵の梅 嵐閣
百八のかねて迷ひや闇の梅 其角
ひとり寝もよき宿とらん初子日 去來
鶯やはや一夢のしたり顔 溪石
鶯や遠路なから禮かへし 其角
鶯や下駄の齒につく小田の土 凡兆
鶯や窓に灸をすゑなから 魚日
藪の雪柳はかりはすかた哉 探丸
此痴は嶺の持へき柳かな 下ト
垣こしにとらへてはなす柳哉 遠水
よこた川植所なき柳かな 尙白
青柳のしたれや鯉の住處 一白
雪汁や蛤いかす庭の隅 木
待中の正月もはやくたり月 楊水
田家に在て

春雨や家根の小草に花咲ぬ
 高山に臥て
 はる雨や山より出る雲の門
 不性さやかき起されし春の雨
 はる雨や田鏡の島の鱒賣
 春雨のあるかや軒に鳴雀
 泥龜や苗代水の畦つたひ
 蜂とまゐる木舞の他や虫の糞
 振舞や下座に直る去年の籬
 はる風にこかすな雛の駕籠の衆
 桃柳くはりありとやをんなの子
 桃の花境しまらぬ垣根かな
 里人の臍おとしたる田にし哉
 蝶の来て一夜寝にけり窓のきは
 紙寫切て白根か嶽をゆくへ哉
 いかのぼりこゝにもすむや潦
 日のかげやこもゝの上の親すゝめ
 荷鞍ふむ春の雀や縁の先
 闇の夜や巢をまとはして鳴衛
 越より飛驒へ行とて
 籠のわたり道のあやふ
 き所く道もなき田
 路にさまよひて
 鷺の巢の樟の枯枝に日は入ぬ
 凡兆

鼠 湖
 猿 雖
 芭 蕉
 史 邦
 羽 紅
 史 邦
 昌 房
 去 來
 荻 子
 羽 紅
 鳥 巢
 鼠 椎
 半 殘
 桃 夭
 固 風
 珍 碩
 芭 芳
 芭 蕉
 凡 兆

霞より見ゆる雲のかしら哉
 子や待んあまの雲雀の高上り
 ひはり鳴中の拍子やきしの聲
 すみれ草小鍋洗ひしあどやこれ
 木瓜筋旅して見たし野はなりぬ
 山吹や宇治の焙爐の匂ふ時
 白玉の露にきはつく椿かな
 わか身かよわく病かちなりけれ
 は髪けつらんも物むつかしと此
 春さまをかへて
 笄もくしもむかしやちり椿
 蝸牛打かふせたる椿かな
 鶯の笠おとししたる椿かな
 初さくら又追くは咲はこそ
 麥ゆしにやつる戀か猫の妻
 うらやましおもひ切る時猫の戀
 うさ友にかまれて猫の空なめ
 霜沾公にて余寒の當座
 春風にぬきもさためぬ羽織哉
 野の梅の散しは寒き二月哉
 出代や櫃にあまれるこさのたけ
 骨柴のかられなから木め哉
 白魚や海苔は下部のかひ合せ
 人の手にとられて後や櫻のり
 春雨にたゞさ出したりつくし
 元志

石 口
 杉 風
 芭 蕉
 曲 水
 山 店
 芭 蕉
 車 來
 羽 紅
 阪 上 氏
 芭 蕉
 利 雪
 芭 蕉
 越 人
 去 來
 龜 翁
 尚 白
 龜 翁
 凡 兆
 其 角
 杉 峰
 元 志

野島や鴈追のけて摘若菜 史邦
初市や雪に漕來る若な船 嵐蘭
宵の月西に響の聞ゆ也 如行
憶翁之客中

裾折て菜を摘しらん草枕 嵐雪
摘すて踏付かたきわかな哉 路通
七くさや跡にうかる朝からす 其角
我事と鯨の逐し根芹哉 丈草
うすらひやわつかに咲る芹の花 其角
臙とは松の黒さに月夜哉 全
鉢たいき來ぬ夜とをれば臙也 去來
鶯の雪踏おとす垣穗哉 一桐
子真館の後に梅ありといへは

子良子の一もとゆかし梅の花 芭蕉
瘦藪や作りたふれの軒の梅 千邦
灰捨て白梅くるむ垣ねかな 凡兆
日當りの梅咲うるや屑牛房 支幽
暗香浮動月黄昏
入相の梅になり込ひいさ哉 風麥

武江にかもむく旅亭の殘 夢
寝くるしき窓の細目や闇の梅 乙姦
辛未の年彌生のはしめつかたよ

しの山に日くれて梅の匂ひし
さりなりければ舊友風窓かみぬ
かたの花や匂ひを案内者といふ
句を日比は古き事のやうにおも
ひ侍れども折にふれて感動身に
しみわたり泪もおとすはかりな
れはその夜の夢に正しくまみぬ
て悦るけしきあり亡人いまだ風
雅を忘れざるや

夢去てまた一句ひ宵の梅 嵐閣
百八のかねて迷ひや闇の梅 其角
ひとり寝もよき宿とらん初子日 去來
鶯やはや一夢のしたり顔 溪石
鶯や遠路なから禮かへし 其角
鶯や下駄の齒につく小田の土 凡兆
鶯や窓に灸をすゑなから 魚日
藪の雪柳はかりはすかた哉 探丸
此痴は猿の持へき柳かな 下ト 究
垣こしにとらへてはなす柳哉 遠水
よこた川植所なき柳かな 尙白
青柳のしたれや鯉の住處 一 啖
雪汁や蛤いかす庭の隅 木 水
待中の正月もはやくたり月 楊 水
田家に在て

春雨や家根の小草に花咲ぬ 鼠湖

高山に臥て

はる雨や山より出る雲の門 猿
不性さやかき起されし春の雨 芭蕉
はる雨や田鏡の島の鱒賣 史邦
春雨のあるかや軒に鳴雀 羽紅
泥龜や苗代水の畦つたひ 史邦
蜂とまゐる木舞の他や虫の糞 昌房
振舞や下座に直る去年の雛 去來
はる風にこかすな雛の駕籠の衆 去來
桃柳くはりありとやをんなの子 羽紅
桃の花境しまらぬ垣根かな 鳥巢
里人の臍おとしたる田にし哉 鼠
蝶の來て一夜寝にけり窓のきは 半殘
紙寫切て白根か嶽をゆくへ哉 桃夭
いかのぼりこゝにもすむや深 固風
日のかげやこもりの上の親すゝめ 珍碩
荷鞍ふむ春の雀や縁の先 士芳
闇の夜や巢をまとはして鳴衛 芭蕉
越より飛驒へ行とて 芭蕉
籠のわたりのあやふ 芭蕉
き所く道もなき田 芭蕉
路にさまよひて 凡兆
鶯の巢の樟の枯枝に日は入ぬ 凡兆

霞より見ゆる雲のかしら哉 石口
子や待んあまり雲雀の高上り 杉風
ひはり鳴中の拍子やきしの聲 芭蕉
すみれ草小鍋洗ひしあとやこれ 曲水
木瓜筋旗して見たし野はなりぬ 山店
山吹や宇治の焙爐の匂ふ時 芭蕉
白玉の露にきはつく椿かな 車來
わか身かよわく病かちなりけれ 車來
は髪けつらんも物むつかしと此 車來
春さまをかへて 車來
笄もくしもむかしやちり椿 羽紅
蝸牛打かふせたる椿かな 阪上氏
鶯の笠おとししたる椿かな 芭蕉
初さくら又追くは咲はこそ 利雪
麥めしにやつるゝ戀か猫の妻 芭蕉
うらやましおもひ切る時猫の戀 越人
うさ友にかまれて猫の空なかり 去來
霜沾公にて余寒の當座 去來
春風にぬきもさためぬ羽織哉 龜翁
野の梅の散しは寒き二月哉 尚白
出代や櫃にあまれるこさのたけ 龜翁
骨柴のかられなからも木のめ哉 凡兆
白魚や海苔は下部のかひ合せ 其角
人の手にとられて後や櫻のり 杉峰
春雨にたゞき出したりつくし 元志

小坊主や松にかくれて山さくら
一枝はをらぬもわろし山櫻
鶏の聲もさきこゆる山さくら
真先にみし枝ならんちる櫻
有明のはつづくに咲遅さくら
常齊にはつれてけふは花の鳥
猶見たし花に明行神の顔
いかの國花垣の庄はそのかみな
らの八重櫻の料に付られけると
いひ傳へければ

一里はみな花守の子孫かや

亡父の墓東武谷中に有しに三歳
にて別れ廿年の後の地に下り
ね墓の前に櫻植置待るよしかね
かね母の物語つたへてその櫻を
尋ねけるに傳への墓猶櫻咲みた
れ侍れば

まかはしや花吸ふ蜂の往還り
知人にあはしと花見哉
ある僧の嫌ひし花の都哉
鼠ども春の夜あそひ花鞆
時き花最中のゆふへかな
はなも奥ありとかやよしのに深
く吟し入て

大峰やよしのと奥の花の果
道漣や花はその代を嵐かな
欄干に夜ちる花の立すかた
焼にけりされども花はちらすまし
花ちるや伽藍の樞おとし行

其尚凡丈史千芭蕉
白兆草邦那蕉

全

園去凡半長
風來兆殘眉

曾嵐羽北凡
良関紅枝兆

木曾塚
望湖水惜
春

海棠の花は満たり夜の月
草臥て宿かる頃や藤の花
山鳥やつしよけ行尾のひねり
山つゝし海に見よとや夕日影
とからして卵の花つはむ彌生哉
鶯の聲聞初てふり山路哉
其春の石どもならず木曾の馬
春の夜は誰か初瀬の堂籠り
行春を近江の人とをしにける
鶯の羽も刷ぬはつしくれ
一ふき風の木の葉しつまる
股引の朝からぬる川こけて
たぬきおどす篠繩の弓
まいら戸に鳶這かゝる宵の月
人にもくれす名物の梨
かさなくる墨繪おかしく秋暮て
はきこゝろよきめりやすの足袋
何事も無言の内はしつかなり
里見は初て午の具ふく
はつれたる去年のねこさの滴たるみ
芙蓉のはなのはらくとちる
吸物は先出来れしすいせんし
三里あまりの道かゝにける
この春も廬同か男居なりにて
さし木つきたる月の朧夜
苔ながら花に並ふる手水鉢

普船芭蕉探丸智月川之式
乙曾芭去芭蕉凡史蕉
州良蕉來蕉凡史蕉

蕉兆邦來蕉邦兆蕉來兆邦來
蕉兆邦來蕉邦兆蕉來兆邦來

ミウチ群て浦の苦屋の盪干見よ
 内へはいりてなをほゆる犬
 醉さめの水の飲たき比なれや
 たしつかなる雨の降出し
 歌合獨古鎌首まいらるゝ
 また献立のみなちかひけり
 灯臺の油こほして押かくし
 白をおこせはきりくす飛
 ふく風にまのころ草のふらくと
 半はこはす筑やまの秋
 ひつくと月みる顔の親に似て
 人の請にはたつともなし
 にはきはしく瓜や直を荷ひ込
 干せる壘のころふ町中
 おろくど小諸の宿の晝時分
 皆 同 者 に 申 念 佛
 百萬もくるひ所よ花の春
 田樂きれて櫻淋しき
 人 下 人 下 人 下 人 全 下 全 人 全 下 全

深川の夜

鴈かねもしすかに聞はからひすや
 酒しぬならふこの頃の月
 藤はかま誰窮窟にめてつらん
 全 芭 蕪 人

大膽に思ひくつれぬ戀をして
 身はぬれ紙の取所なき
 小刀の蛤及なる細工はこ
 棚に火ともす大年の夜
 こもとはおもふ便も須戸の浦
 ひね打合せ着たるかたきぬ
 此夏もかなめをくゝる破扇
 醬油ねさせてしはし月見る
 咳聲の隣はちかき縁つたひ
 添へはそふはとこくめんな顔
 形なき給を習ひたる會津盆
 うす雪かゝる竹の割下駄
 花に又ことしのつれも定らす
 雛の袂を染まはるかせ
 嵐 風 芳 雖 風 殘 雖 風 殘 芳 殘
 史 邦 野 水 羽 紅

幻住巻記

芭 蕉 艸

石山の奥岩間のうしろに山有國分山と云そのかみ
 國分寺の名を傳ふなるへし麓に細き流を渡りて
 翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゞせ給ふ
 神体は彌陀の尊像とかや唯一の家には甚忌なる事
 を兩部光を和け利益の塵を同しうしたまふも又貴
 し日比は人の詣さりけるはいとゞ神さひ物しつか
 なる傍に住すてし草の戸有よき根笹軒をかこみ
 屋ねもり壁落て狐狸ふしとを得たり幻住巻と云わ

るしの僧何かしは勇士菅沼氏曲水子の伯父になん
侍りしを今は八年斗ひかしに成て正に幻住老人の
名をのみ残せり予又市中をさる事十年斗にして五
十年や、ちかき身は糞虫のみのを失ひ蝸牛家を離
て奥羽象瀉の暑き日に面をこかし高すなこあゆみ
くるしき北海の荒磯にさひすを破りて今歳湖水
の波に漂鳥の浮巢の流るゝまるへき芦の一もとの
陰たのもしく軒端茨あらためん垣ね結添などして
卯月の初いとかり初に入し山のやかて出しとさへ
おもひとみぬさすかに春の名残も遠からすつゝし
咲残り山藤松に懸て時鳥しはく過る程宿かし鳥
の更さへ有を木つゝさのつゝくともいとほしなど
をゝるに興して魂吳楚東南にはしり身は瀟湘洞庭
に立つ山と未申にそはたつ人家よきほどに隔り南
薰峰よりおろし北風海を浸して涼し日枝の山比良
の高根より幸崎の松は霞こめて城有橋有釣たるゝ
舟有笠とりにかよふ木樵の聲麓の小田に早苗とる
歌螢飛かふ夕闇の空に水鶴の扣音美景物としてた
らすと云事なし中にも三上山は土峰の傍にかよひ
て武藏野の古き栖もおもひいてられ田上山に古人
をかそふさゝはか嶽千丈か峰裕腰といふ山有黒澤
の里はいとくろろう茂りて網代守るにそとよみけん
萬葉の姿なりけり猶眺望くまなからむと後の峰に
這のはり松の柵作藁の圓座を敷て猿の腰掛と名付

笠越の菅蓑斗枕の上の柱は懸たり畫の橋くどふ
らふ人々よ心を動しあるの宮守の翁里のおのこ共
入來りていのまゝの稻くひあらし鬼の豆畑まかよ
ふあと我聞えらぬ農談日既よ山の端まかしの夜
坐静よ月を待ての影を伴ひ燈を取ての岡岡よ是非
をこらすかくいへはとてひたふるよ閑寂を好み山
野よ跡をかくさむとよいあらずや病身人よ倦て
世をいとひし人よ似たり情年月の移こし拙き身の
科をおもふよある時仕官懸食の地をうらやみ一
たひの佛籬祖室の扉よ入らむとせしもたよりなき
風雲よ身をせめ花鳥よ情を勞して暫く生涯のはか
り事とさへなれ終よ無能無才よして此一筋よつ
なかる樂天の五隴の神をやふり老杜の瘦たり賢愚
交質のひとしからざるもいつれか幻の栖ならずや
どおもひ捨てふしぬ

先たのむ椎の木もわり夏木立

圓苜蓿翁國分山幻住菴記之後

何世無隱士以心隱爲賢也何處無山川
風景因人美也聞讀芭蕉翁幻住菴記乃
識其賢且知山川得其人而益美矣可謂
人與山川共相得焉廼作鄙章一篇歌之
曰

菴湖南分國分嶺 古松鬱分綠陰濤
茅屋竹椽幾數間 內有佳人獨養生

浦口錦輝山川 風景依稀入誹城
此地自古富勝覽 今日因君尙益榮

震軒具卿

此右日記

時鳥背中見てやる響かな
くつさめの跡まつかんつ山
鶏もはらく時か水鶏なく
海山も五月雨そふや一くらみ
軒ちかき岩梨おるな猿のあし
細腰のやすゆ處や夏山
野水 去來 凡兆 千那 珍碩

贈紙帳

日の下や手洗ふ程は海涼し
贈所米や早苗のたけは夕涼
半殘

麥の粉を土産す

一袋これや鳥羽田のことし麥
一夏入る山さひかりや旅ねすき
夕立や檜木の臭の一まきり
秋風や田上山のくほみより
えら露もまたあらみのし行術哉
木履ぬく傍は生けり蓼の花
籬よこす薬袋や萩の露
稻の花これ佛の土産哉
石山や行かて果せし秋の風
昌房 何處 越人 等哉 嵐 蘭 智月 羽紅

あり
文云こ
す
腎言
昇猿腰掛
贈箋
包紙と書

桶の輪やされく鳴やむきりくす
里いひま夕めし時のあつさ哉
啼やいとと盪はほこりのたまり迄
越人と同しく訪合て
遣の實の供は飛入菴かな
明年彌生尋舊菴
春雨やあらしも果す戸のひつみ
同夏
嵐 蘭
涼しさや此菴をさへ住捨し
登良

跋

猿篋者芭蕉翁滑稽之首韻也非比彼
山寺偷衣朝市頂冠笑只任心感物寫
興而已矣洛下逸人凡兆去來隨翁遊
學謀館竹窓隙等凌節斯有歲屬撰此
集玩弄無已自謂絶超孤腋白裘者也
於是四方險友憧々往來或千里寄書
今中皆有佳句日蘊月隆各程文章然
有昆仲騷士不集錄者索居竄柵爲難
通信且有旒倪婦人不琢磨者龜言細
語爲喜喜同志雖無至其域何棄其人乎
哉果分四序作六卷故不遺廣搜他家
文林也維吹元祿四稔辛未仲夏余掛
錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席見需記

鶏かあかるとやかて暮の月 蕉
 通りのなさは見世たつる秋 考
 盆まひ一荷て直さる鮎の魚 然
 晝寐の癖をなをしかねけり 蕉
 聾か来てよつどもせず物語 考
 中國よりの狀の吉左右 然
 朔日の日にとこへやら振舞れ 蕉
 一重羽織か失てたつぬる 考
 ささんしな青葉の比。櫻楓 然
 山よ門ある有明の月 蕉
 初あらし鳥の八のかけまなり 考
 水際光る濱の小鱗 然
 見て通る紀三井の花の咲かしり 蕉
 荷持ひとりよいとく永き日 考
 こち風の又西なり北よあり 然
 わか手又脈を大事からるも 蕉
 後呼の内儀の今度屋敷から 考
 喧嘩のさたもむさとせられぬ 然
 大せつな日か二日有暮の鐘 蕉
 雪かさわけし中のとろ道 考
 來る程の乗掛の皆出家衆 然
 奥の世置の近年の作 蕉
 酒よりも肴のやすき月見して 考
 赤鶏頭を庭の正面 然

定まらぬ娘の心取しつめ 蕉
 寐汗のどまると今朝かたの夢 考
 鳥籠をつらりとおこす松の風 然
 大工つかひの奥に聞ゆる 蕉
 米搗もけふはよしとて歸る也 考
 から身て市の中を押あふ 蕉
 此あたり彌生は花のけもなく 然
 鴨の油のまたぬけぬ春 考

今宵賦 野盤子 支子 考

今宵は六月十六日のそら水にかよひ月は東方の亂
 山にかよけて衣裳に湖水の秋をふくむされは今宵
 のあそひはしめより尊卑の席をくはらねとしは
 く酌てみたらす人そくく涼みふして野を思
 ひ山をおもふたまかくかたりなせる人さへさらに
 人を興せしめむとにあらねはあなからに辨のたく
 みをもとめず唯萍の水にしたかひ水の魚をすまし
 むるたどへにを待りける阿叟は深川の草庵に四年
 の春秋をかさねてことしはみな月さつきのあは
 を渡りて伊賀の山中に父母の古墳をとふらひ浴の
 嵯峨山に旅ねして加茂祇園の涼みにもたよはす
 かくてや此山に秋をまたれけむと思ふにさすか湖
 水の納涼もわすれかたくてまた三四里の暑を凌て
 爰に草鞋の駕をとむ今宵は菅沼氏をあるしとし

大きな鐘のどんに聞ゆる
盛なる花にも扉おしよせて
腰かけつみし藤棚の下
高考然

春之部

温石のあかるゝ夜半やはつ櫻
寝時分に又みむ月かはつ櫻
顔に似ぬはつ句も出よ初さくら
ちか道や木の股くゝる花の山
角いれし人をかしらや花の友
花散て竹見る軒のやすさ哉
富貴なる酒屋にあそひて文君か
爪音も酔のまされに思ひいてら
るゝに

酒部屋に琴の音せよ窓の花
賭にして降出されけりさくら狩
人の氣もかく窺しはつ櫻
くもる日や野中の花の北面
七つより花見におこる女中哉
見る所おもふ所やはつさくら
咲花をむつかしけなる老木哉
我庭や木ふり見直すはつ櫻
二の膳やさくら吹込む鯛の鼻

惟然 支考 沾德 猿雖 陽和 乙州 木節 沾荷 子珊

花櫻

田家

若菜

梅柳

簗虫の出方にひらく櫻哉
蒨蕪の名物とはんやま櫻
咲かゝる花や飯米五十石
山門に花ものゝし木のふどり
なかれ木の根やあらはるゝ花の瀧
花笠をきせて似合ひ人は誰
はれやかに置床なをす花の春少年
ぬり直す壁のしめりや軒の花
一日は花見のあてや且那寺
八重櫻京にも移る奈良茶哉
濡様や薺こほるゝ土なから
鼻の啼やむ岨の若菜かな
夕波の船にきこゆるなつな哉
一かふの牡丹は寒き若菜哉
春色もやゝ氣色どゝのふ月と梅
ささらさや大黒棚もむめの花
守梅のあそひ業なり野老賣
里坊に誰さくやむめの花
投入や梅の相手は露のたう
病僧庭はれ梅のさかり哉
あたらしき翠簾また寒し梅花
薄雪や梅の際まで下駄の跡
しら梅やたしかな家もなきあたり
寝所や梅のにはひをたて籠ん

卓袋 季里 桃首 一桐 如雪 其角 卓一 法圖 全圖 嵐雪 曲翠 孤屋 尾頭 芭蕉 野水 其角 昌房 良品 曾良 万乎 魚日 千川 大丹

白魚のしろき噂もつきぬへし
深山にありひて
其角

春草

なくりても萌たつ世話や春の草
若艸や松につけたき蟻の道
春の野やいつれの草にかふれけん
川淀や淡をやすむるあしの角
宵の雨しるや土筆の長みしか
味ひや櫻の花によめかはさ
茨はら咲そふものも鬼あさみ
堤よりころひ落ればすみれ哉
踏またれ土堤の切目や落の塔
ふみたふす形に花され土大根
早蕨や笠どり山の柱うり
みそ部屋のねはひに肥る三葉哉
日の影に猫の爪出す獨活芽哉
蒲公英や葉にはそくはぬ花さかり
我影や月になを啼猫の戀
うき戀にたへてや猫の盜喰
れもひかねその里たける野猫哉
とまりても翅は動く胡蝶哉
衣更着のかさねや寒き蝶の羽
蝶の舞わたつる椿にうたるとな
山峰
正秀
此筋
羽紅
猿雖
開指
車來
荒雀
馬荒
拙候
乃龍
正秀
一夕可
一桐
圖箔
深丸
支考
已百
柳梅
閨然
指

猫戀

胡蝶

白日靜也

鳥魚

天神のやしるに詣て

身につけと祈るや梅の籬さは
それくの臍のなりや梅柳
時くは水にかちけり川やなき
ちか道を教へちからや古柳
青柳のしたれくれや馬の曲
輪をかけて馬乗通る柳哉
鶯に長刀かくる承塵かな
うくひすや野は塀越の風呂あかり
鶯に手もと休むなかしもと
うくひすや柳のうしろ藪のまへ
瀧壺もひしけと雉のはろ哉
春雨や簑につまん雉子の聲
駒鳥の目のさやはつす高根哉
こま鳥の音に似合しき白銀屋
燕や田をおりかへす馬のあと
巢の中や身を細しておや燕
雀子や姉にもらひし籠の櫃
鯛うちになる雀の子飼哉
行鴨や東風につれての磯惜み
芳野西河の瀧
鮎の子の心すさまじ瀧の音
かけろふと共にとらつく小鮎哉
しら魚の一かたまりや汐たるみ
遊糸
千那
意元
李由
九節
正秀
其角
史邦
智月
芭蕉
去來
洒堂
傘下
長虹
野童
峰嵐
槐市
河瓢
釣帯
土芳
圃水
子珊

春鹿 春耕

桃 椿

秋冬

風吹に舞の出来たる小蝶哉
 晝ねして花にせはしき胡蝶哉
 振おとし行や廣野の鹿の角
 妙福のこゝろあて有さくら麻
 苗札や笠縫をさの宵月夜
 千刈の田をかへすなり難波人
 白桃やしつくも落す水の色
 金柑はまた盛なり桃の花
 伏見かど薬種の上の桃の花
 梅さくら中をたるます桃の花
 花さそふ桃や歌舞妓の腸躍
 江東の李由か祖父の懐舊
 の法事におのゝく經文題
 のはつ句に彌陀の光明と
 いふ事を

小服綿に光をやとせ玉つはき
 穂は枯て臺に花咲椿かな
 取あけて見るや椿のはその穴
 ちり椿あまりもろさに續て見る
 山吹や垣に干たる裳一重
 田家の人に對して
 山吹も散るか祭の囀なます
 堀おこすつゝしの株や蟻のより
 藪疇や穂麥にとゞく藤の花

重行 雪窓 澤雉 木節 此筋 一鷺 桃隣 介花 雪芝 水鷗 其角

角上 殘香 洞木 野坡 關指 洒堂 雪芝 荆口

郭公

草木 園中

元日や置どころなき猫の五器
 我やどはかつらに鏡すゑにけり
 搗栗や餅にやははれそのしめり
 虫はしのその日に似たり藏ひらき

夏之部

曉の雲をさそふやはとゞきす
 はとゞきす啼や湖水のさら濁
 しら濱や何を木かけにはとゞきす
 蜀魄啼ぬ夜白し朝熊山
 鳴瀧の名にやせりあふはとゞきす
 燕の居なしむ空やはとゞきす
 淀よりも勢田になけかし杜鵑

此句は石山の麓にて順禮
 の吟して通りけるとや
 郭公かさいの森や中やどり
 橙や日のくもれたる夏木立
 里の姿かはりぬ夏木たち
 此中の古木はいつれ柿の花
 手切の老木も柿の若葉哉
 姫百合や上よりさかる蛛の糸
 題山家之百合
 しら雲やかさねを渡る百合花

竹戸 是木 沾圃 圃角

其角 丈艸 曾良 支考 如童 芦鴈

沾圃 關指 野萩 此筋 千川 素就

山も如にのかれて咲や杜若
冷汁はひへすましたり杜若
手のとく水際うれしきつはた
夏菊や茄子の花は先へさく

夏はせを庵の即興

晝かはや日はくもれども花盛
夕顔や酔てかは出す窓の穴
夕かはや裸ておきて夜半過
藻の花をちみよせたる入江哉
蘭の花に飛たぐ水濁り哉
蓮の葉や心もどなき水離れ
客あるし共に蓮の蠅おはん
朝露によこれて涼し瓜の土
姫ふりや袖に入ても重からず
兪相なる勝は出されぬ牡丹哉
京入や鳥羽の田植の歸る中
早乙女に結んでやらん笠の紐
ふとる身の植れくれたる早苗哉
田植歌まである顔の諷ひ出し
一田つゝ行めぐりてや水の音
里の子か燕握る早苗かな
蚊遣火の烟をるいはたる哉
三日月に草の螢は明にけり
涼しさや竹握り行敷つたひ

はたん
早苗

螢

納涼

無菓花や廣葉にむかふ夕涼
深川の庵に宿して

はせを葉や風なきうらの朝涼
涼しさや駕籠を出ての繩手みち
石ぶしや裏門明て夕すいみ
涼しさよ牛の尾振て川の中
腰かけて中に涼しき階子かな
涼しさや椽より足をふらさける
生酔をねちすくめたる涼かな
はせを翁を茅屋にまねき

漫興三句

盛夏

涼風も出来した壁のこはれ哉
いそかしき中をぬけたる涼かな
立ありく人にまされて涼かな
黙禮にこまる涼や石の上
職人の帷子きたる夕すいみ
涼しさや一重羽織の風たまり
夜涼やむかひの見せは月かさす
かたはみや照りかたまりし庭の隅
李盛る見世のはこりの暑哉
藪醫者のいさめ申されし
に答へ侍る
實にもとは請て寐冷の暑哉
取茸の内のあつさや棒つかひ

竹の子

五月雨

夕立

雑夏
かつを

燥さかる日盛あつし臺所オナリ怒風
 茨ゆ垣もしまらぬ暑かな 我ナガ素覽
 草の戸や暑を月に取かへす 印苔
 あつき日や扇をかさす手のはそり 卓袋
 積あけて暑さいやます疊かな 里東
 粘になる匏も夜のあつさかな 沾圃
 立寄ればむつとらやの暑哉 可誠
 筍にぬはるゝ岸の崩かな 曲翠
 若竹や烟のいつる庫裏の窓 不玉
 しら鷺や青くもならず微の中 芭蕉
 さみたれや鬮煩ふ桑の畑 沾圃
 五月雨や踵よこれぬ磯つたひ 拙候
 夕立にさし合けり日傘 苔蘇
 白雨や蓮の葉たゝく池の芦 曉鳥
 夕たちやちらしかけたる竹の皮 圃水
 ゆふ立に傘かる家やまへ町 正秀
 白雨や中戻りして蟬の聲 胡故
 きつと成て啼て去りけり蟬の聲 乙州
 森の蟬涼しき聲やあつき聲 曉鳥
 蟬啼やぬの織る窓の暮時分 葉拾
 籠の目や潮こはるゝはつかつは 松風
 晝寝して手の動やむ圃かな 荆口
 虫の喰ふ夏菜とはしや寺の畑 眞
 夏瘦もねかひの中のひとつ也

川狩にい
てい

名月

玄か焼や麥からくへて柳鮓 文鳥
 異草に家からかはや圃の紫蘇 蔦平
 夕闇ははたるもしるや酒はやし 水鷗
 せはきとところに老母をや
 しなひて
 魚あふる幸もあれ漉うちは 馬寛
 梅無さや旅かたむく日の面 望翠
 澤瀉や道付かゆる雨のあて 野章
 蝸牛つの引藤のそよきかな 水鷗
 晋の淵明をうらやむ
 窓形に晝寐の臺や簟 惟然
 粘こはる帷子かふる晝寐かな
 貧僧のくるしく冬の寒さ
 をふせくよすかなきに夏
 日の納涼は扇一本にして
 世上に交はる
 帷子のねかひはやすし錢五百 支者
 秋之部
 名月に麓の霧や田のくもり はせを
 名月の花かど見へて棉島
 ことしは伊賀の山中にして名月の夜この二
 句をなし出していつれか是いつれか非なら

んと侍りしに此間わかつへからす月をまつ
高根の雲はれにけりこゝろあるへき初時
雨かなと圍位はうしのたどり申されし體は
霧横に水なかれて平田渺々も曇りたるは
老杜か唯雲水のみなりといへるにもかなへ
るなるへしうの次の棉はたけは言葉籠にし
て心はなやかなりいは、今のこのむ所一筋
の便あらん月のかつらのみやはなるひかり
を花とちらす斗にともひやりたれば花に
清香あり月に陰ありて是も詩哥の間をもれ
すまからは前は寂寞をむねとし後は風興を
もつばらにす吾こゝろ何そ是非をはかる事
をなさむた、後の人なをあるへし

支考評

名月の海より冷る田藪かな 酒堂
明月や西にかゝれば蚊屋の月 如行
ものくの心根とはん月見哉 露沾
両つあらはいさかひやせんけふの月 智月
名月や長屋の陰て人の行 關指
明月や更科よりのとまり客 涼葉
明月や灰吹捨る陰もなし 不玉
中切の梨に氣のつく月み哉 配力
名月や草のくらみに白き花 左柳

名月や里のにはひの青手柴 木枝
場に住て月見なからや薙機 利合
明月や輝かしましき女中方 丹楓
明月や何もひろはす夜の道 野萩
飛入の客に手をうつ月見哉 正秀
淀川のはとりに日をくら
して

舟引の道かたよけて月見哉 丈草
待宵の月に床しや定飛脚 景桃
家に三老女といふ事あり
亡父將監か秘して傳へ侍
りしを思ひ出て

明月や遠見の松に人もなし 圃水
おかむ氣もなくてたふとやけふの月 山峰
明月や寝ぬ處には門しめす 風國
名月や四五人乗し船ふね 需笑
老の身は今宵の月も門てみむ 重友
明月よかくれし星のあはれに 泥芹
伊勢の山田にありてかり
の庵を思ひ立ける時
二見まて庵地たつぬる月見哉 支考
芥子藪と畑まて行かん月見哉 空牙
柿の名の五助と共に月見哉 如真
山鳥のちつと寝ぬや峯の月 宗比

姨捨を闇にのほるやけふの月
露おきて月入あどや癖のやね
蔦かつら月またたたらぬ梢哉
月影や海の音聞長廊下
深川の末五本松といふ所
に船をさして

沾圃
馬東
牧童

立秋 秋草

川上とこの川しもや月の友
十六夜はわつかに闇の初哉
いさよひは闇の間もなしけみの花
更行や水田の上のあまの河
星合を見置て語れ朝からす
船形りの雲しはらくやほしの影
たなはたをいかなる神にいふへき
朝風や薫姫の團もち
栗ぬかや庭に片よる今朝の秋
秋たつや中に吹る、雲の峯
朝露の花透過す桔梗哉
細工にもならぬ桔梗のつほみ哉
女郎花ねひぬ馬骨の姿かな
をみなへし鶴坂の杖にたもかれな
一筋の花野にちかし畑道
弓固とる比なれや藤はかま
贈芭蕉菴
百合の過芙蓉と語る命かな

芭蕉
全猿
涼然
東潮
沾圃
乙州
露川
左次
柳梅
隨交
濁子
馬覓
烏栗
支浪
風麥

時雨

粟からの小家作らむ松の中
あら鷹の壁に近つく夜寒哉
残る蚊や忘れ時出る秋の雨
身ふるひに露のこほる、鞆かな
更る夜や稻こく家の笑聲
柿の葉に焼みと盛らん薄箸
本間主馬か宅に骸骨どもの笛鼓
をかまへて能する處を畫て舞臺
の壁にかけたりまことに生前のた
はふれなどはこのあそひに殊な
らんやかの鬮腰を枕として終に
夢うつゝをわかたさるも只この
生前をしめさるゝもの也
稻つまやかほのところか薄の穂
冬之部
この比の垣の結目やはつ時雨
しくれ年は又松風の只をかす
けふはかり人も年よれ初時雨
一時雨またくつをるゝ日影かな
初しくれ小鍋の芋の煮加減
平押に五反田くもる時雨かな
柴賣やいてゝしくれの幾廻り
梳賣も出よ芳野の初時雨
空熊の出ては引込時雨哉

圃友
畦止
口友
萩子
万乎
宗波
野坡
北枝
芭蕉
露沾
馬覓
野明
闔指
空牙
爲有

冬枯

本柳坊宗比の庵をたつね

八十二

鳥附を

はいるより先取てみる落葉哉
 枯はてゝ霜にはちすやをみなへし
 牛の行道は枯野のはしめかな
 冬枯に去年きてみたる友もなし
 草枯に手うつてたゞぬ鴨もあり
 野は枯てのはす物なし鶴の首
 木からしや色にも見へす散もせず
 風や背中ふかるゝ牛の聲
 木枯や刈田の畔の鐵瀛水
 こからしや藁まさらす牛の角
 るひす講酢賣に袴着せにけり
 惠比須講齋も鴨に成にけり
 能登の海を見て
 塵濱にたゞぬ日もなし浦衝
 追かけて電にころふ千鳥哉
 小夜ちどり庚申まぢの舟屋形
 入海や碇の笠に啼千鳥
 鷺につゝみてぬくし鴨の足
 たつ鴨を犬追かくるつゝみかな
 汲沙にころひ入へき生海鼠哉
 うか／＼と海月に交るなまこ哉
 見へ透や子持ひらめのうす氷

一 道
 杉風
 乃龍
 利牛
 支考
 智月
 風訂
 惟然
 塵生
 芭蕉
 利合
 句空
 蔦雪
 丈草
 閨指
 芭蕉
 乍木
 利雪
 車席
 俗水

冬月附食

埋火

雪

一盤に初白魚や雪の前
 かくふつや腹をならへて降霰
 杜夫魚は河豚の大きにて
 水上に浮ふ越の川にのみ
 あるうおなり

喰ものや門うりありく冬の月
 あら猫のかけ出す軒や冬の月
 何事も寝入るまてなり紙ふすま
 水仙や門を出れば江の月夜
 埋火や壁には客の影はうし
 侘しさは夜着を懸たる火燵かな
 自由さや月を追行置火燵
 初雪や門に橋あり夕間暮
 朝こみや月雪うすき酒の味
 雪あられ心のかはる寒さ哉
 鶴鶴家はとさるゝはたれ雪
 雪垣やしらぬ人には霜のたて
 ふたつ子も草鞋を出すやけふの雪
 片壁や雪降かゝるすさ俵
 思はすの雪見や日枝の前後
 髪剃は降来る雪か比良のたけ
 伊賀大和かさなる山や雪の花

杉風
 拙候
 里圃
 丈草
 小春
 支考
 芭蕉
 桃先
 洞木
 其角
 全菊
 夕菊
 祐甫
 蔦平
 支考
 圃吟
 丈草
 陽和
 配力

神樂
鉢たゝき

煤掃
餅つき

歳暮
節季
衣配

夜神樂に齒も喰しめぬ寒哉
食時やかならず下手の鉢たゝき
鉢たゝき千鯉賣をすゝめけり
嫁入の門も過けり鉢たゝき
狼を送りかへすか鉢たゝき
煤はきや鼠追込黄楊の中
煤はきやわたまにかふるみなど紙
才覺な隣のかゝや煤見舞
煤はきやわすれて出る鉢扣
煤掃や折敷一枚踏くらゝ
餅つきや火をかいて行男部や
餅つきやあかりかねたる鶏のとや
もち搗の手傳ひするや小山伏
こね返す道も師走の市のさま
門砂やまきしてはすの洗ひ髪
賣石やとつてもいなす年の暮
猿も木にのほりすますやとしの暮
大年や親子たはらの指荷ひ
袴きぬ舞入もあり年のくれ
年の市誰を呼らん羽織との
打こはす小豆も市の師走哉
引結ふ一つふ銀やとしの暮
番の輪のひとつあたらし年の暮
天鵝毛のさいふさかして年の暮

史邦
路草
馬寛
許六
沾圃
殘香
黃逸
馬寬
問如
惟然
借水
嵐蘭
馬佛
曾良
里東
革士
車來
万平
李由
其角
正秀
萩子
猿雖
惟然

正月の魚のかしらや炭たひら
けさの春寂しからざる閑かな
あいゝ松なき門もおもしろや
大服の去年の青葉の匂ひ哉
鶯の聲聞まいれ年おとこ
傘は齒朶かゝりけりえ方柳
袖すりて松の葉ちらす今朝の春
たてし見む霞やうつる大かすみ
曙の春の初やたうふくら
はつ春のめてたき名賢魚々
初夢や濱名の橋の今のさま
えつやえつ御階まけふの麥厚し
煎りつけて砂路あつし原の馬
回國の心さしも漸く伊
勢の國よいたりて
文臺の扇ひらけり秋涼し
我蒲團いたしく旅の寒かな
常陸の國あしあらひとい
ふ所は行暮てやどり求ん
どせしよその夜いさる事
ありとて宿をかさしりけ
れり一夜別時の軒の下よ
かしまりふして
椽は寐る情や梅も小豆粥

傘下
冬松
柳風
防川
昌勝
夕道
梅舌
野水
全人
越人
全人
荷分
史邦
呂丸
沾圃
支考

いさゆかむ雪見よこふ所さて
 竹の雪落て夜るなく雀かな
 かさなるや雪のある山只の山
 車道雪なき冬のあしたかな
 はつ雪を見てから顔を洗けり
 はつ雪よ戸明ぬ留主の庵哉
 ものかげのふらぬも雪のつ哉
 くらき夜よ物陰見たり雪の隈
 雪降て馬屋よはいる雀かな
 夜の雪おとさぬやうよ枝折らん
 ゆきの日や川筋斗ほそくと
 初雪やおしよさる手の奇麗へ
 雪の江の大舟よりは小舟かな
 雪の朝から雫わくる聲高し
 雪の暮猶さやけしや鷹の聲
 ちらくや淡雪かゝる酒強飯
 はつ雪や先草履よて隣まで
 はかられし雪の見所有り所
 舟かけていくかふれども海の雪
 二日よもぬかりはせしな花の春
 たれ人の手からもからし花の春
 わか水や凡千年のつるへ繩
 松かさり伊勢か家買人は誰
 うたか百連歌よあらすよし香

芭蕉 塵交 加生 小春 是幸 松芳 二水 除風 鶯汀 傘下 芳川 冬文 桂夕 荷兮 野水 芳川 芭蕉 古梵 風鈴軒 共角 文麟

歳旦

月雪のためよもまたし門の松
 かさり木よならて年ふる柏哉
 元朝や何となければと遅さくら
 元日は明すましたるかすみ哉
 齒固よ梅の花かむ匂ひ哉
 ふたつ社老よいたらぬとしの春
 若水をうちかけて見よ雪の梅
 伊勢浦や御木引休む今朝の春
 とふきの名をつけてみむ宿の梅
 去年の春ちいさかりしか芋頭
 小桐子栗やひろわむまつのかと
 どし男千秋樂をならひけり
 山柴より白まじる籠かな
 松高し引馬つるし年おとこ
 月花の初ハ琵琶の木とり哉
 連てきて子よまのせけり万歳樂
 うら白もはみちる神の馬屋哉
 見おほえむこや新玉の年の海
 今朝と起て繩ふしほとく柳哉
 さほ姫やふかしの面いかならむ
 蓬萊や舟の匠のかんなくす
 佛より神そたうとき今朝の春
 のく宮やとしの旦はいかならん
 かさりよとたか思ひたすたいら物

去來 一品 一路 笑行 落梧 同洞 昌碧 元廣 舟泉 同五 重五 釣雪 全井 一井 胡及 長虹 鼠彈 同水 濡水 朴什 冬文

洛東の眞如堂にして善光寺如來
開帳の時

涼しくも野山に見つる念佛哉
有ると無きと二本さしけりけしの花
けし畑やちりしつまりて佛在世
ものふに川越向ふや富士もうて
手まはしに朝の間涼し夏念佛
食堂に雀啼なり夕しくれ
旅之部
支野重乙智去
考坡翠州月來

送別

元祿七年の夏はせを翁の別を見
送りて

麥ぬかに餅屋のみせの別かな
別るゝや柿食ひながら阪の上
惟荷
然兮

許六か木曾路におも
むく時
旅人のころにも似よ椎の花
芭蕉

留別

洛の惟然か宅より古
郷に歸る時

鼠ども出立の芋をこかし鼻
鮎の子のしら魚返る別かな
芭蕉
丈艸

甲斐のみふに詣ける時

宇都の山邊にかゝりて

十三夜
朔日
二日
三日
四日
五日
六日
七日

めいけつはありきもたらぬ林かな
宵に見し橋はさひしや月の影
影ふた夜たらぬ程見る月夜哉
暮いかに月の氣もなし海の果
見る人もたしなき月の夕哉
何事見たてにも似す三日の露
夕月夜あんとんけしてはしみむ
何日とも見されためかたや宵の月
銀川見習ふ比や月のそら
能はどにはなして歸る月夜哉
雪二十句 大津にて
雪の日や船頭どの顔の色
一つ屋やいかいと見るけふの月
名月は夜明るきはもなかりけり
名月やとしに十二は有ながら
名月やかいつきたてゝつなく舟
めいけつやはたしてありく草の中
名月や鼓の聲と犬のこゑ
見るものと覺ゑて人の月見哉
名月の心いそぎに
むつかしと月を見る日は火も焼かし
いつの月も跡を忘れて哀也
名月や海もおもはす山も見す
名土や下戸と下戸とのむつまじさ
釣雪
一髮
杉風
荷兮
芭蕉
ト枝
一泉
鶴聲
一髮
其角
龜洞
越人
文鱗
昌碧
傘下
二水
野水
荷兮
全來
去來
胡及

むめの花もの氣よいらぬけしき哉
 敷見えれもとりよ折らん梅の花
 梅折てあたり見廻す野中哉
 華もなきむめのすいそ頼もしき
 みのむしとえれつる梅のさかり哉
 網代民部の息と逢て
 梅の木よなをやとり木や梅の花
 うくひすの鳴そこあへる嵐かな
 鶯の鳴や餌ひろふ片手よも
 わけほのや鶯とまらばね釣瓶
 鶯よちいさき鼓も捨られし
 うくひすの聲又脱たる頭巾哉
 鶯よなきみもなきや新屋敷
 うくひすよ水汲こほすあした哉
 さどかすむ夕をまつの盛かな
 行くて程のかはらぬ霞かな
 行人の簑をはなれぬ霞かな
 かけろふや馬の眼のどろくと
 水仙の見る間を春と得たりけり
 蝶鳥を待るけしきやものゝ枝
 つきたかど兒のぬき見るさし木哉
 つまの下つくしかねたる繼穂哉
 曉の釣瓶よわかるつはさかな

越人 落梧 一髮 冬松 蕉笠
 芭蕉 若風 去來 一桐 一笑
 市柳 夢々 梅舌 野水 塵交
 冬蕉 芭蕉 傘下 路通 荷分
 舟泉 傘下 荷分

さし木
 接木
 椿

同 春雨
 同 白尾鷹

藪深く蝶氣のつかぬつはさかな
 はる雨のわの望一かどよりかな
 春の雨弟どもを呼てこよ
 はやふさの尻つかけたる白尾かな
 蜘蛛の井よ春雨かふる車かな
 立白よ若草見たる明屋かな
 すこくと親子摘けりつくし
 すこくとつむやつますや土筆
 すこくと紫山子の出けり土筆
 土橋やよこよはへたるつくし
 川舟や手をのへてつむつくし
 土筆頭巾よたまるひとつより
 蘭亭の主人池よ鵝を愛せ
 られし筆意有故
 池よ鵝なし假名書習ふ柳陰
 風の吹方を後の柳かな
 何事もなしと過行柳かな
 さし柳たし直なるもおもしろし
 尺ばかりはやたはみぬる柳か
 すかれく柳は風よどりつかひ
 どりつきて筏をとむるやなきかな
 さはれども髪のゆかまぬ柳かな
 みしかくて垣よのかるく柳かな
 吹風よ牛のわきむく柳かな

卜枝 湍水 鼠彈 野水 奇生 龜助 舟泉 其角 蕉笠 塘車 冬文 青江
 素堂 野水 越人 一笑 小春 一碧 杏雨 此橋 杏雨

仲春

万歳を仕舞ふてうてる青田かな
つはさまで折をへらるしさくらかな
廣庭よ一本植しさくらかな
ときくは簀干さくら咲みけり
手のとしくほどの折らるし櫻か
うしろより見られぬ岨の櫻かな
すてくと山やくれけむ遅さくら
はる風もちからくらふる雲雀かな
あふのきよ寝てみむ野邊の雲雀かな
高聲よつらをおかむる雉子かな
行かしくり輪繩解てやる雉子かな
手をついて歌やあくる蛙かな
吹かせよ鷹かたよするやなきかな
かせふかぬ日わかなるの柳かな
いそかしき野鍛冶をしらぬ柳かな
蝙蝠よみたるし月の柳かな
青柳よもたれて通す車かな
引いきよ後へころふ柳かな
菊の名は忘れられとも植よけり
麥の葉よ菜のはあかする嵐かな
菜の花や杉菜の土手のあいよ
なの花の座敷よりうつる日影かな
なの花の畦うちのかすなめかな
うこくとも見えて畑うつ籠かな

昌越人 除風 一冬 野水 除雪 一盤 宗鑑 松芳 荷分 同 素秋 鷗歩 生林 不悔 長虹 傘下 清洞 去來

暮春

はうろくの土とる跡い萱かき
晝はかり日のさす洞の萱かな
草刈て萱選出す萱かな
行蝶のどまり残さぬあさみかな
麥畑の人見るはるの塘かな
はけ山や朧の月のすみ所
ほろくと山吹ちるか瀧の音
松明よやま吹うすし夜の色
山吹とてふのまされぬあらしかな
一重かと山吹のそくゆふへかな
どりつきて山吹のそくいばねかな
あそふともゆくともえらぬ燕か
鳴立ていりあひ聞ぬかはつか
あかつきをむつかしうさう鳴蛙
いくすへり骨折る岸のかはつ哉
飛入てまはし水ゆく蛙哉
不図と飛て後よ居なをる蛙哉
ゆふやみの唐網よいるかはつか
はつ蝶を兒の見出す笑かな
櫻欄の葉よとまらて過る胡蝶哉
かやはらの中を出かぬるこふ哉
かれ芝や若葉たつねて行胡蝶
何の氣もつかぬよ土手の萱かな
ねふたしと馬より乗らぬ萱かな

野水 舟歩 鷗遊 枉國 芭蕉 野水 下襟 蓬雨 落梧 越人 去來 落梧 松井 一柳 梅風 炊玉 百歲 忠知 荷分

杜宇 二十句

はとよきすを飼をくものに求跡
て放やる時に

鳥籠の憂目見つらん郭公
目には青葉山はとよきす初かつは
いそかしき中に聞けり蜀魄
蠟燭のひかりにくしやはとよきす
おひし子の口まねするや時鳥
跡や先氣のつく野邊の郭公
はとよきとれからさかむ野の廣さ
ある人のもとにて發句せよと有

季吟 素堂 釣雪 越人 松下 重五 柳風

ければ

はとよきすはかりもなき鳥かな
晴ちさる空鳴行やはとよきす
蚊屋臭さね覺うつゝや時鳥
三聲はと跡のおかしや郭公
はとよきす十日もはやき夜舟哉
嬉しさや寝入らぬ先のはとよきす
あふなしや今起てさく郭公
くらかりや力かましさはとよきす
馬と馬よりはりあひけり郭公
たゝあり明の月を殘れると吟し
られしに

哥かるたにくき人かな郭公
智月

遊にて

うつかりとうつふきわたり郭公
うつかりと春の心そはとよきす
月三十句

かるくと篋のうへゆく月夜哉
それかしも月見中の獨かな
月ひとつはひとりからの今宵哉
雨の有とこともなしの薄あかり
けうとさに少脇むく月夜哉
屋わたりの宵はさひしや月の影
おかしけにはめて詠る月夜かな
とこまでも見とをす月の野中哉
峠迄 硯抱て 月見かな
一つ屋やいかいと見るけふの月
名月は夜明るきはもなかりけり
名月やとしに十二は有なから
名月やかいつきたてゝつなく舟
めいけつやはたしてありく草の中
名月や鼓の聲と犬のこゑ
見るものと覺えて人の月見哉
名月の心いそきに
むつかしと月を見る日は火も焼かし
いつの月も跡を忘れて哀也
名月や海もおもはず山も見す
名月や下戸と下戸とのむつましさ

李桃 市山 梅舌 湍水 一雪 越人 昌碧 市柳 一髮 長虹 任他 龜洞 越人 文麟 昌碧 傘下 二水 野水 荷兮 全來 去來 胡及

涅槃像あかき表具も目にたゞす
ねはん會や敲手合る珠數の音
山寺や猫守り居るねはん像
貧福のまことをしるや涅槃像
灌佛やつしならふる井戸のやね
散花や佛うまれて二三日
灌佛や釋迦と提婆は從弟とし
喰物もみな水くさし魂まつり
寢道具のかた／＼やうき魂まつり
やま伏や坊主をやとふ玉まつり
甲戌の夏大津に侍しをこのかみ
のもとより消息せられければ舊
里に歸りて盆會をいとなむと
て
家はみな杖にしら髪の墓參
悼少年二句
かなしさや麻木の箸もおとなゝみ
その親をしりぬその子は秋の風
かまくらの龍口寺に詣て
首の座は稻妻のするその時か
はか原や稻妻やどる桶の水
袖も柿もおかまにけり御影講
腸をさくりにて見れば納豆汁
何のあれかのあれけふは大師講

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉
沾圃 沾圃 沾圃 沾圃 沾圃 沾圃 沾圃 沾圃 沾圃 沾圃
石撒 山峰 曲翠 不玉 之道 鼠雪 去來 沾圃
惟然 支考 木節 支梁 沾圃 許六 如行

万歳のやとを隣に明にけり
己のとしやひかしの春のおほつかな
我等式か宿にも來るや今朝の春
若菜つむ跡は木を割畑哉
精出して摘ども見ぬ若菜哉
七草をたゞさたかりて泣子哉
女出て鶴たつおとの若菜かな
側濡て袂のおもき磯菜かな
吾うらものこしてをかぬ若菜かな
石釣てつほみたる梅折しけり
鷹居て打にもどかし梅の花
むめの花もの氣にいらぬけしき哉
藪見しれもどりに折らん梅の花
梅折てあたり見廻す野中哉
華もなきむめのすはいと頼もしき
みのむしとしれつる梅のさかり哉
網代民部の息に逢て
梅の木になをやどり木や梅の花
うくひすの鳴をこなへる嵐かな
鶯の鳴や飼ひるふ片手にも
あけはのや鶯とまるはね釣瓶
鶯にちいさき護も捨られし
うくひすの聲に脱たる頭巾哉

同 同 貞室 越人 野松 俊似 小春 藤蘿 素秋 玄察 鷗步 越人 落梧 冬髮 蕉笠 芭蕉 若風 去來 一桐 一笑 市柳

松島雲居の寺にて

一葉散音かしまじきはかりこツレ仙
 かたひらのちしむや秋の夕けしきツレ方生
 男くさき羽織を星の手向哉 杏雨
 朝貝の酒盛まらぬさかりかな 芭蕉
 朝顔や垣はのましのまるらくさ 文麟
 あさかほの白き露も見へぬこ 荷吟
 子を守るものよいひし詞

の句はなりて

朝顔をその子よやるなくらふもの 荷吟
 隣なるあさかほ竹まうつしけり 鷗歩
 わさかほやひくみの水も残る月 胡及
 葉より葉も物いふやうな露の音 鼠弾
 秋風やまらきの弓も弦はらん 去來
 涼しさの座敷より釣鱸かな 昌長
 畦道も乗物すゆるいなはかな 一汀
 まつむしは通る跡より鳴えけり 鶯
 さりくす燈臺消て鳴えけり 素秋
 あつ雲の稻つまを待たより哉 芭蕉
 いなつまやきのふの東けふの西 其角
 ふまれてもなをうつくしや萩の花 舟泉
 ひよろくと猶露けしや女郎哉 芭蕉
 棚作るはしめさひしき葡萄哉 不知
 艸ほらくからぬも荷も花野哉 任口

芳野出て布子賣かし更衣 杜國
 麥うつや内外もなき志賀のさど 重五
 五月雨にかくれぬもや瀬田の橋 芭蕉
 湖の水まさりけり五月雨 去來
 牛もなし鳥羽のあたりの五月雨 一髮

角田川にて

いさのはれ嵯峨の鮎食ひに都鳥 貞室
 みよしのはいかに秋立貝の音 破笠
 いさよひもまたさらしなの郡哉 芭蕉
 夕月や杖に水なふる角田川 越人

九月十三夜

唐土に富士あらはけふの月も見よ 素堂
 鴨突の馬やり過す鳥羽田哉 胡及
 鴨突は登津のあまのむまこ哉 淵支
 武藏野やいく所にもみる時雨 舟泉
 湖を屋根から見せん村しくれ 尚白
 から崎やとまりあはせて初時雨 隨友
 むさし野とおもへど冬の日あし哉 洗惡
 めつらしと生海風を焼や小の、奥 俊似
 冬されの獨轆轤やをの、おく 一笑
 雪の富士藁屋一つにかくれけり 湍水
 よし野山も唯大雪の夕かな 野水
 星崎のやみを見よとや鴨千鳥 芭蕉
 夜るの日や不破の小家の燐拂 如行

鏡者天
鏡者壽
藤房
師直
一休
法然
凶岩
海岩
名所

然而夜半有々力者負之而走

絶聖棄知大盜乃止

からなから師走の市にうるさうい
七夕よ物かすともなきむかし
散はてゝ跡なきものは花火かな
鶏頭の雪になる迄紅かな
はどゞさす鳴やむ時をしりにけり
うつくしく人にみらるゝ荊哉
いろくのかたちおかしや月の雲
鳴聲のつくろひもなきうづら哉
おく山は雲に減るか岩の角
苔とりし跡には土もなかりけり
八重かすみ奥迄見たる龍田哉
しら魚の骨や式部か大江山
から崎の松は花より臍にて
葉一把かりて花見る阿波手哉
嵯峨まては見事あゆみぬ花盛
琵琶橋眺望
雪残る鬼獄さびき彌生かな
關こけて爰も藤しろみさかな
美濃國關といふ所の山寺
に藤の咲たるを見て吟し
給ふと也

桂市
一井
長虹
湍水
鼠彈
全水
荷分
芭蕉
湍水
荷分
宗祇法師
舍咭

卯辰巳午未申

凶獸
野鳥
里虫
海魚
川魚

宮中拾得娥眉斧不献吾王
是愛君

花なから植かへらるゝ牡丹かな

王昭君

玉貌風沙勝畫圖

よの木にもまされぬ冬の柳哉

一日留主をすする事侍りて

寐やの蚊や御佛供焼火に出て行

杜若生ん繪書の來る日かな

講釋の眠りにつかふ扇かな

水あひよ藍干上を踏すども

蟬の音に武家の夕食過にけり

五月雨や鶏とまるはね作

所にありて生をたつ事

非なし

鹿笛の上手をつくすあはれさよ

鳴突の行影長き日あし哉

枝なから虫うりに行蜀漆かな

おもしろと鬮引り盆の月

秋の昏鴨川くゝの火ふり哉

牛馬四足是謂天落馬首穿

牛尾是謂人

一方は梅さく桃の繼木かな

藏舟於壑藏凶於澤謂之固

釣雪

樹水
兒竹
舍咭
全咭
舍咭
越人

寂寞深村夜殘雁雪中聞
鉢たゞき出もこぬむらや雪のかり

白頭夜禮佛名經

佛名の禮に腰懐く白髪かな

禪閣の撰ひのこし給日し

もさすかにおかしくて

かけるふの夕日にいたきつふり哉

五道閻水鷄てはなし人の家

かへるさや酒のみによる秋の里

あさ露のきはう折けむつくもかみ

こからしの松の葉かきとつれ立て

越人

鏝屑目立
付木突
釣瓶繩打
糊賣
馬家搔

李夫人

魂在何許香煙引到焚處

かけるふの抱つけはわかこるも哉

揚貴妃

雲髻半偏新睡覺花冠不整

下堂

はる風に帯ゆるみたる寐顔かな

眼陽人

小頭鞋履窄衣裳青袋獸眉

々細長外人不覺々應笑

もの數奇やむかしの春の儘ならん

西施

留春春不留春歸人寂寞

行春もこころへかはの野寺かな

巖風吹袂衣不寒復不熱

綿脱は松かせ聞に行こるか

池晚蓮芳謝

蓮の香も行水したる氣色かな

暑月貧家何處有客來唯贈

北窓風

涼めとて切ぬきにけり北のまど

大底四時心摠昔就中斷腸

是秋天

雪の旅をれらてはなし秋の空

夜來風雨後秋氣颯然新

秋の雨はれて瓜よふ人もなし

遅々鍾漏初夜長歌々星河

欲曙

ひとしきりひた なりて夜と長さ

殘影燈閉牆斜光月穿牖

獨り寝や泣たる顔にまどの月

万物秋霜能懷色

白菊や素顔て見むと秋の霜

十月紅南天氣好可憐冬景

似春美

こからしもしはし息つく小春哉

仲秋

もえきれて紙燭をなぐる薄哉
 行人や掘よはせらんむら薄
 宗祇法師のとはよよりて
 名もしらぬ小草花さく野菊哉
 としくのふる根も高きすしき哉
 かれ柔よ鳥のどまりけり秋の暮
 つくくしと繪を見る秋の扇哉
 谷川や茶袋そしく秋のくれ
 石切の音も聞けり秋のくれ
 斧のねや蝙蝠出る秋の暮
 鹿の音よ人只見る夕へ哉
 田と畑を獨りまたの心案山子哉
 山賤か鹿驚作りて笑けり
 紅葉よいたかをしへける酒の間
 玄らぬ人と物いひて見る紅葉哉
 藪の中よ紅葉みしかき立枝哉
 とことなく地よはふ葛の哀へ
 わか宿いとこやら秋の草葉哉
 わか草庵またつねられし
 比
 恥もせず我なり秋どおこりけり
 索堂へまかりて
 はすの實のぬけつくしたる蓮のみか
 一本の芦の穂瘦しむせき哉

荷 胡 素 俊 芭 小 益 傘 一 一 重 其 東 林 越 宗
 兮 及 堂 似 蕉 春 音 下 枝 髮 泉 五 角 順 斧 水 和
 北 越 防
 枝 人 川

暮秋

よしのよ

松の木よ吹あてられき秋の蝶
 はつとしてねられぬ蚊屋のわかれ哉
 心よもかしらぬ市のさぬた哉
 關の素牛よこひて
 さそ砧孫六やしき志津やしき
 きぬたうちて我よきかせよ坊かつま
 いそかしや野分の空の夜這星
 なまどなく植しか菊の白き哉
 玄ら菊のちらぬそ少口おしき
 山路のさく野菊とも又ちかひけり
 一色や作らぬ菊の花さかり
 荷分か室よ旅ねする夜草
 臥赤をせとて箔はけたる
 土器出されけれり
 かはらけの手さに見せはや菊の花
 菊のつゆ凋る人や髪帽子
 けふよなりて菊作ふとおもひけり
 かなくりにて葛さへ霜の鹽木哉
 淋しさは櫃の實落るね覺哉
 残る葉ものこらすちれや梅もどき
 芦の穂やまねく哀よりちるあはれ
 あめつちのはなしとたゆる時雨哉
 京なる人よやつかひしけ
 る

舟 胡 曉 共 芭 一 巴 昌 越 曉
 泉 及 郎 角 蕉 笑 丈 碧 人 歸
 共 同 二 千 千 加 路 湖
 角 水 關 夕 生 通 春

初冬

一夜来て三井寺うたへ初まくれ
はつまくれ何おもひ出すこの夕
万句興行よ
えまり逢ふ人のやどりの時雨哉
人を待たくる日よ
今朝の猶そらはかり見るしくれ哉
釣かねの下降のこすまくれ哉
渡し守はかり簑着るしくれ哉
こからしよ二日の月のふさちるか
一葉つし柿の葉みなよ成よけり
このはたく跡は淋しき圍爐裏哉
枇杷の花人のあするも木蔭かな
茶の花のものつるてよみたる哉
梨の花去くれよぬれて猶淋し
簑虫のいつから見るや歸花
麥まきて奇麗よなりし庵哉
のどけしや麥まき比の衣かへ
縫ものをたしみてあたる火燧哉
石臼の破れておかしやつはの花
青くともどくさの冬の見物哉
あたらしき釣瓶よかゝる葱かな
冬枯よ風の休みもなき野哉
蓮池よかたちは見ゆる枯葉哉
鷹居て石けつまつくかれ野かな

荷 白
濡 水
落 梧
炊 玉
傘 下
荷 孛
一 變
同 同
同 同
李 晨
野 水
昌 碧
全 井
一 梧
落 及
胡 鱗
文 枝
卜 雪
洞 芳
松 芳

寒月 仲冬

兼題雪舟

こからしよ吹とられけり鷹の巾
鷹狩の路よひきたる蕪哉
爐を出て度く月を面白き
あさ漬の大根あらふ月夜哉
おろしおく鐘まつかなる霰哉
まら浪どつれてたはしる霰哉
掻よする馬糞よまじる霰哉
柴の戸をほどく間よやむあられ哉
いたしける柴をひろせはあられ哉
霜の朝せんたんの實のこほれけり
水棚の茶の葉よ見たる氷かな
深き池水のときよ覗きけり
つさかりてまつ葉かさけり薄氷
打かりて何をよしたき氷柱哉
昨より雪舟乗をろす嫌木哉
ぬつくりと雪舟よ乗たるよくさ哉
夜をこめて雪舟よ乗たるよめり哉
馬屋より雪舟引出す朝かな
雪舟引や休むも直よ立てある
つけかへておくるし雪舟のはや緒哉
青海や羽白黒鴨赤かしら
舟またく火よ聲たつる千鳥かな
朝鮮を見たるあるらん友千鳥
井をほるものい六月寒く

杏 雨
野 水
俊 似
勝 吉
重 治
林 斧
杏 雨
宗 之
杜 國
勝 吉
俊 似
除 風
夜 舟
鼠 彈
荷 兮
長 虹
一 井
龜 洞
合 咕
忠 知
龜 洞
村 俊

米つく男の冬裸なり
 汗出して谷に突こむ氷室哉
 海鼠腸の壺埋めたき氷むろ哉
 炭籠の穴ふさくやら薄けふり
 膝節をつかめど出るさむさ哉
 火とほして幾日なりぬ冬棒
 いつこけし庇起せぬ冬つなぎ
 冬籠りまたよりそはん此はしら
 餅つきや内ももおらす酒くらひ
 吾書てよめぬ物あり年のくれ
 もち花の後いすけちりぬへし
 はる近く柁つみかゆる菜畑哉
 煤はらひ梅よさけたる瓢かち
 木曾の月みてくる人のみ
 やけよとて村の實ひとつ
 おくらる年の暮迄うしな
 ぬすかさりよやせんとして
 としのくれ村の實一つころくと
 門松をうりて蛤一荷ひ
 田作よ鼠追ふよの寒さかな

冬 利重
 盤車
 一 盤
 龜 洞
 野 水
 荷 白
 李 下
 芭 蕉
 龜 洞
 一 盤
 荷 洞
 荷 洞
 荷 洞

雜
 年中行事内十二句
 供屠蘇白散

荷 洞

鏡者天
 鈍者毒
 藤房
 師直
 一休
 法然
 凶岩
 海岩
 名所

然而夜半有々力者負之而
 走
 からなから師走の市よりうるさしい
 絶聖樂知大盜乃止
 七夕よ物かすともなきむかし
 散はてし跡なきものゝ花火かな
 鶏頭の雪よなる迄紅かな
 ほとしきき鳴やむ時を去りまはり
 うつくしく人よみらるゝ刺哉
 いろくのかたちおかしや月の雲
 鳴聲のつくるひもなきうつら哉
 おく山の霞よ滅るか岩の角
 苦どりし跡よの土もあかりけり
 八重がすみ奥迄見たる龍田哉
 しら魚の骨や式部か大江山
 から崎の松は花より朧みて
 鏡一把かりて花見る阿波手哉
 嗟峨まては見事あゆみぬ花盛
 琵琶橋眺望
 雪残る鬼獄さむき彌生かな
 關てえて爰も勝しろみさかな
 美濃國關といふ所の山寺
 よ藤の咲たるを見て吟し
 給ふと也

桂 市 凶
 一 井
 長 虹
 湍 水
 鼠 彈
 湍 水
 全 水
 杜 園
 荷 亭
 芭 蕉
 湍 水
 荷 亭
 合 帖
 宗 祇 法師

芳野出て布子賣おし更衣
姿うつや内外もなき志賀のさど
五月雨まかくれぬものや瀬田の橋
湖の水まさりけり五月雨
牛もなし鳥羽のわたりの五月雨
角田川よて

いさのほれ嵯峨の鮎食ひよ都鳥
みよしのいいかよ秋立貝の音
いさよひもまたさらしなの郡哉
夕月や杖よ水なふる角田川
九月十三夜

唐土よ富士あらけふの月も見よ
鳴突の馬やり過す鳥羽田哉
鳴突の萱津のあまのむまこ哉
武藏野やいく所よもみる時雨
湖を屋根から見せん村しくれ
から崎やどまりあわせて初時雨
むさし野どおもへ冬の日あし哉
めつらしと生海鼠を焼や小のし奥
冬されの獨轆轤やをのしかく
雪の富士藪屋一つまかくれけり
よし野山も唯大雪の夕かお
星崎のやみを見よとや鳴千鳥
夜るの日や不破の小家の煤拂

旅

雲雀より上よやすらふ味かな

大和國平尾村よて

花の陰 詠よ似たる旅ねかお
櫻咲里を眠りて通りけり
日の入や舟よ見て行桃の花
のどけしや漆の晝の生さかな
ひとつ脱てうしろよおひぬ衣かへ
ある人の餓別よ

ほととぎす涙おさへて笑けり

寝いらぬみ食焼宿を明やすき
蚊をころすうちよ夜明る旅寝哉

五月雨や柱目を出す市の家
夕立よその大名か一まほり

芭蕉士を送る

稻妻よはしりつきたる別かな
なきくて袂よすかる秋の罫
あき風よゆかねたるわかれ哉
物いはしたしよへ秋のかなしよ
霧はれよすかたと松よ見へぬ迄
さらしなよ行人よよむか
ひて

更級の月よ二人よ見られけり

越人旅立けるよし聞て京
かすつかいず

芭蕉

全楓

夕髪

一髪

荷分

芭蕉

除風

冬松

昌碧

松芳

傘下

釣雪

一井

野水

舟泉

鼠彈

荷分

荷分

月は行脇指つめよ馬のうへ
 おくられつおくりつはては木曾の秋
 駒の巢の是もちり行秋のいほ
 狩野桶といふ物其角のは
 なむけよおくるとて
 狩野桶は鹿をなつて秋の山
 とまりノ、稻すり歌も替けり
 入月の今まはし行とまり哉
 能きけり親舟よりうつきぬた哉
 品川よて人よわかるると
 て

澤菴の墓をわかれの秋の暮
 艸枕犬もまくるしか夜るの聲
 旅なれぬ刀うたてや村しくれ
 鳴海よて芭蕉子よ逢ふて
 いく落葉をればと袖もほころひす
 夢よ見し羽織の綿の入よけり
 其角よわかるると時
 あしたつたひとりたつたる冬の宿
 天龍てたしかれたまへ雪の暮
 から尻の馬よみてゆく千鳥哉
 里人のわたりゆかはしの霜
 越人と吉田の驛よて
 寒けれと二人旅ねそたのもしき

芭蕉 常秀 荷登 野水 越人 宗因 芭蕉

辞世

妻の追善

伊勢よて

あはれ之燈籠一つよ主コ齊
 子よおくれける比
 似た顔のあらへ出てみん一躍り
 一原野よて
 をく露や小助かほねの見事さよ
 をみさへしえての里人それたのむ
 季下か妻のみまかりしを
 いたみて
 ねられずやかたへひえゆく北おろし
 コ齊身まかりし後
 その人の躰さへなし秋のくれ
 母よおくれける子の哀れ
 を
 おさあ子やひとり食くふ秋の暮
 ある人の追善よ
 埋火もきゆやあみたの煮る音
 旅よてみまかりける人を
 あは雪のどしかぬうちよ消よけり
 鳥邊野のかたや念佛の冬の道
 釋教
 神垣やおもひもかけす涅槃像
 負てくる母おろしけりねはん像
 西行上人五百歳忌よ
 はつきりど有明残るさくらかな

落椿 釣雪 自悦 去來 其角 荷白 芭蕉 鼠彈 小春 芭蕉 鼠彈 荷登

かなし遠思よ
連翹や其望日とまほれけり
うし首よ蜂の巢かくる二王哉
木履はく僧も有けり雨の花
つりかねを扇てたしく花の寺
花よ酒僧ども侘ん盥さかな
貞享つちのへ辰の歳彌生
其冬松
角松國
胡松及

東照宮の別當僧正の御房
よ慈惠大師遷座執事法華
八講の侍るよし尊き事な
れは聴聞よまかりて序品
のころを

散る花のあいたひひかしはなし哉
女房の聴聞所と覺て御簾
たれかく暗き所あり龍女
成佛の所よ至りてまのひ
あへず鼻かむ聲のしけれ
越人

ほろりと落ちる涙やへひの玉
観音の尾上の櫻咲よけり
古寺やつるさぬかねの萱草
海士の家聖よひこむ彌生哉
咲よけりふへんな寺の紅牡丹
同
俊似
一井
一千
一井

八島よて

奈良よて

高野よて

十如是
即身即佛

夏山や木陰くの江湖部屋
灌佛の日よ生れ逢ふ鹿の子哉
灌佛の其比清しまらかさね
腰のあふき禮義ばかりの御山哉
齋よ來て菴一日の清水かな
おもふ事流れて通るしみつ哉
夏陰の晝寐のほんの佛哉
はころひや僧の纏ある夏衣
かどろくや門もてありく施餓鬼棚
折かけの火をとるむしのかなしさよ
石籠よ施餓鬼の棚のくつれ哉
魂祭舟より酒を手向けり
たままつり道ふみあくる野菊哉
接待のはしら見たてん松の陰
平木施一切
接待よたし行人をとしめけり
稻妻よ大佛おかむ野中哉
垣越よ引導覗くはせを哉
ある人四時の景物なりと
て水鶏と鶉を不食不聞其
心を感じて我も鴈をくら
はす
鴈くはぬ心佛よならぬを
ある寺の興行よ
蕪葉
芭蕉
尙白
一雪
一笑
荷兮
愚益
鼠彈
荷兮
探丸
文里
龜洞
卜枝
釣雪
俊似
荷兮
ト枝
荷兮

煤はらい梅にさけたる瓢かな 一髪

木曾の月みてる人のみやけに
とて柿の實ひとつおくらる年の
暮迄うしなはすかさりにやせん
とて

としのくれ柿の實一つころくど
門松をうりて蛤一荷ひ
田作に風追ふよの寒さかな
荷 内明 荷 洞

雑

年中行事内十二句

供屠蘇白散

いはけなやとそなめそむる人次第

春日祭

としとに鳥居の藤のつはみ哉

石清水臨時祭

杳音もしつかにかさすさくら哉

けふの日やついてに洗ふ佛達

おも瘦て葵付たる髪薄し

うち明てはとこす米そ虫臭さ

わか菜より七夕草を覺へよき

爪髪も旅のすかたやこまむかへ

草の葉や足のおれたるさりくす

玉しさの衣かへよととかへり花

荷 吟

灌佛
端午
施米
乞巧費
駒迎
撰虫
十月更衣

追難

舞姫に幾たひ指を折にけり
おはれてや脇にはつるゝ鬼の面

詩題十六句

今日不知誰計春風春

水一時來

氷あし添水またなる春の風

白片落梅浮澗水

水鳥のはしに付たる梅白し

春來無伴閑遊少

花賣に留主たのまるゝ隣かな

花下忘歸因美景

寢入なはもの引きせよ花の下

留春春不留春歸人寂寞

行春もこゝろへかはの野寺かな

巖風吹袂衣不寒復不熱

綿脱は松かせ聞に行ころか

池晚蓮芳謝

蓮の香も行水したる氣色かな

暑月貧家何處有客來

唯贈北窓風

涼めとて切ぬきにけり北のまど

大底四時心抱昔就中

斷腸是秋天
雪の旅それらてはなし秋の空

野 水

夜來風雨後秋氣颯然新
秋の雨はれて瓜よふ人もなし

遅々鐘漏初夜長歌々
星河欲曙天

ひとしきりひたるうなりて夜を長さ
殘影燈閉猶斜光月穿牖

獨り寐や泣たる顔にまどの月
万物秋霜能懷色

白菊や素顔て見ひと秋の霜
十月紅南天氣好可憐

冬景似春美
こからしもしはし息つく小春哉

寂寞深村夜殘雁雪中聞
鉢たゝさ出もこぬむらや雪のかり

白頭夜禮佛名經
佛名の禮に腰懷く白髪かな

禪閣の撰ひのこし給日しもさす
かにおかしくて

かけるふの夕日にいたきつふり哉
五道開水鶏てはなし人の家

かへるさや酒のみによる秋の里
あさ露のきはう折けむつくもがみ

こからしの松の葉かさどつれ立て

舟泉

鋸屑目立
付木突
釣瓶繩打
糊賣
馬糞搔

李夫人

越人

魂在何許香煙引到焚處
かけるふの抱つけはわかこるも哉

揚貴妃
雲髻半偏新睡覺花冠

不整下堂
はる風に帯ゆるみたる寢顔かな

眼陽人
小頭鞋履窄衣裳青袋獸眉々細長

外人不見々應笑
もの數奇やむかしの春の儘ならん

西施
宮中拾得娥眉斧不猷

吾王是愛君
花なから植かへらるゝ牡丹かな

王昭君
玉貌風姿勝畫圖

よの木にもまされぬ冬の柳哉
一日留主をすする事侍りて

寢やの蚊や御佛供焼火に出て行
杜若生ん繪書の來る日かな

講釋の眠りにつかふ扇かな
水あひよ藍干上を踏すとも

蟬の音に武家の夕食過にけり

釣雪

未 午 巳 辰 卯

麥をわすれ華よおほれぬ隔ならし
この文人の事つかりてど
どけられしを三人開き幾
度も吟して

野 荷 越

手をさしかさす峯のかけるふ
鑄の路もまどろみ春の來て
ものまつかあるおこし米うり
門の石月待開のやすらひよ
風の目利を初秋の雲
武士の鷹うつ山もほど近し
まをりよついで瀧の鳴る音
袋より經どり出す草のうへ
つふと降られて過るむら雨
立かへり松明直きる道の端
千句いとむ北山のてら
姥さくら一重櫻も咲残り
あてともなき夕月夜かな
露の身へ泥のやうなる物思ひ
秋を赤をなく盗人の妻
明るやら西も東も鐘の聲
さふうなりたる利根の川舟
冬の日のてかくとしてかき曇
豕子よ行と羽織うち着て
ふらくとどきのふの市の塩いなた

水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮

狐つきとや人の見るらむ
拍木の脚氣の比のつくくと
さしやくとのみな開えつる
月の影より合よけり辻相撲
秋よなるより里の酒桶
露まくれ歩鶴も出る暮かけて
うれしどまのふ不破の萬作
かしこまる諫は涙こぼすらし
火箸のはねて手のあつきん
かくすもの見せよと人の立かもしり
水せきとめて池のかへどり
花さかり都もいまた定らす
捨て春ふる奉加帳なり
墨そめい正月とよわすれつ
大根きさみて干よいそかし

水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮 水 人 兮

遠浅や浪よまめさす瀬どり
はるの舟間よ酒のなき里
のどけしや早き泊よ荷を解て
百足の懼る薬たきけり
夕月の雲の白さをうち詠
夜寒の簀を裾よ引きせ
萩の聲とこともまらぬ所そや

龜 洞 兮 荷 兮 昌 碧 兮 野 水 兮 舟 泉 兮 釣 雪 兮 筆

たまたつり道ふみあくる野菊哉
接待のはしら見たてん松の陰
平木施一切
俊似
ト 枝

接待にたゝ行人をどゝめけり
稻妻に大佛おかむ野中哉
垣越に引導覗くはせを哉
ある人四時の景物な
りどて水鶏と鶉を不
食不聞其心を感じて
我も鴈をくらはす
荷兮

鴈くはぬ心佛にならぬを
ある寺の興行に
燕も御寺の鼓かへりうて
進み出て坊主おかしや月の舟
鉢の子に木綿をうくる法師哉
人のもとはありてた
ち出むとしけるにま
たしくれければ
衣着て又はなしけり一時雨
鎌倉の安國論寺にて
たうとさの涙や直に氷るらん
古寺の雪
越人

曝や伽藍くくの雪見廻ひ
同
荷兮

雪折やかゝる二王の片腕
つくり置てこはされもせし雪佛
朝寝する人のさはりや鉢たゝさ
千観か馬もかせはし年のくれ
薬王品七句
其角

如寒者得火
まつ白にむめの咲たつみなみ哉
如裸者得衣
雪の日や酒樽拾ふあまの家
如商人得主
双六のあひてよひこむついでり哉
如子得母
竹たてゝおけはとりつくさゝけ哉
如渡得船
月の比隣の榎木きりにけり
如病得醫
かはくときき清水見付る山邊哉
如暗得燈
秋の夜やおひゆるるときに起さるゝ
古宮や雪しるかゝる獅子頭
二月廿五日奉納に
荷兮

ささらさや廿四日の月の梅
しんくくと梅ちりかゝる庭火哉
鷺も水あひてこよ神の梅
同
雪

神祇

荷吟か四十の春に

幾春も竹其儘に見ゆるかな
君か代やみかくとなき玉つはき
青苔は何はともとれ沖の石
いさみたま豊の上に杖つかん
千代の秋にはひにしるしことし米
しはしかくれぬける人に申遣

重五
越人
傘下
龜洞
同

先祝へ梅を心の冬籠り

芭蕉

曠野集員外

誰か花をおもはさらむた
れか市中にありて朝のけ
しきを見む我東四明の麓
に有て花のこゝろはこれ
を心とすよつて佐田川喜
かいのよしの山をあさな
あさなどいへる歌を實に
かんす又

麥喰し鴈と思へどわかれ哉
此句尾陽の野水子の作と
て芭蕉翁の傳へしをなを

さりに聞しにさいつ比田
野へ居をうつして實に此
句を感すむかしあまた有
ける人の中に虎の物語せ
しにどらに追はれたる人
ありて獨色を變したるよ
し誠のおほふへからざる
事左のとし猿を聞て實に
下る三聲のなみたといへ
るも實の字老杜のこゝろ
なるをや猶鴈の句をした
ひて

麥をわすれ華におほれぬ鴈ならし
この文人の事つかりてと
どけられしを三人開き幾
度も吟して
手をさしかさす峰のかけろふ
鑿の路もしどろに春の來て
ものしつかなるおこし米うり
門の石月待闇のやすらひに
風の目利を初秋の雲
武士の鷹うつ山もほど近し
しどりについで瀧の鳴る音
袋より經どり出す草のうへ

野水 荷人 野水 荷人
越人 野水 荷人 野水

捨て春ふる奉加帳なり
墨そめは正月とにわすれつゝ
大根ささみて干にいそかし

遠淺や浜にしめさす鯛とり
はるの舟間に酒のなき里
のとけしや早き泊に荷を解て
百足の懼る薬たきけり
夕月の雲の白さをうち詠
夜寒の簑を裾に引きせ
萩の聲とこともしらぬ所そや
一駄過して是も古綿
道の邊に立暮したるさねか麻
樂する比とおもふ年榮
いくつともななくてめつたに蔵造
湯殿まいりのもめむたつ也
涼しやと薙もてくる川の端
たらかされしやイる月
秋風に女車の罷かどこ
袖を露けき嵯峨の法輪
時くにもものさへくはぬ花の春
八重山吹ははたちなるへし
三日のいてやけふは何せん暖に

龜洞 荷兮 昌碧 野水 舟泉 釣雪 昌碧 野水 舟泉 釣雪 昌碧 野水 舟泉 釣雪 昌碧 野水 舟泉 釣雪

人水兮

心やすけに土もらふなり
向まて突やるほどの小ふねにて
垢離かく人の着ものゝ番
配所にて干魚の加減覺ゆつゝ
歌うたふたる聲のはそく
むく起に物いひつけて亦睡り
門を過行茄子よひこむ
いりこみて足輕町の敷深し
おもひ逢たりとれも高田派
盃もわするはかりの下戸の月
やゝはつ秋のやみあかりなる
つはくらはおほかた歸る寮の窓
水しほはゆき安房の小湊
夏の日や見る間に泥の照付て
桶のかつらを入しまひけり
人なみに脇差さして花に行
ついたつくりは落る精進

龜洞 荷兮 昌碧 野水 舟泉 釣雪 昌碧 野水 舟泉 釣雪 昌碧 野水 舟泉 釣雪 昌碧 野水 舟泉 釣雪

美しき鱒のうきけり春の水
柳のうらのかまきりの聲
夕霞染物とりてかいるらん
けふたきやうに見ゆる月影
秋草のともなき程咲みたれ

舟泉 松芳 冬文 荷兮 松芳

花咲けりと心まめなり
天仙夢に冷食あさし春の暮
かけかねかけよ看經の中
た一人となりて着物うちばをり
夕せはしき酒ついでやる
駒のやと昨日は信濃けふは甲斐
秋のあらしに昔浮瑠璃
めてたくもよはれにけらし生見魄
八日の月のすきといるまて
山の端に松と糖とのかすかなる
さつきたはこにくらくとする
暑き日や腹かけ斗引むすひ
太鼓たゝきに階子のほるか
ころくゝと寐たる木質の脚枕
氣たてのよきと聲にはしかる
忍ともまらぬ顔にて一二年
庇をつけて住居かはりぬ
三方の敷むつかしと火にくふる
供奉の脚鞋を谷へはきこみ
段くや小鹽大原薩峨の花
人かひに行はるの川岸

全水全全全水兮水全兮水兮水兮全水全兮

一里の炭賣のいつ冬籠
かけひの先の瓶氷る朝
さきくさや正木を引よ誘らん
肩きぬはつれ酒よよふ人
夕月の入きは早き塘さ
たならぬ脚をつかみこむ秋
里深く雨敷よ二三日
宮司か妻よほれられて憂
問いれても涙よ物の云よくき
高籠とくきて切ほとく文
うとくゝと寐起なから湯をわかす
寒ゆく夜半の越の雪鋤
あま事かよはりあひてうち笑ひ
蛤とりのみさ女中なり
浦風よ睡吹まくる月涼し
みるもかしこき紀伊の魂屋
若者のさし矢射ておる花の陰
蒜くらふ香よ遠さかどけり
紙子の綿の裾よ落つら
はなしする内もさいく手を洗
座敷ほとある蚊屋を釣けり
木はさみよあかるうなりし松の枝

一鼠一鼠一鼠一鼠一鼠一鼠
井彈及虹井彈虹及井彈

秤よかゝる人くの興 胡及
 此年よなりて炎の跡もなき 一井
 まくらもせずよつゝ寐入月 鼠彈
 暮過て障子の陰のうそ寒き 胡及
 こきたるやうよまほむ萩の成 長虹
 此有様入道の宮のはかなけよ 鼠彈
 衣引かふる人の足音 一井
 毒なりと瓜一されも喰ぬえ 長虹
 片風たちて過る白雨 胡及
 板へきて踏所なき庭の内 一井
 はねのぬけたる黒き唐丸 鼠彈
 ぬくくど日足のまれの花曇 長虹
 見わたすほとけのみなつしん 胡及

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らの常よ芭蕉の軒よ行かよ
 ひ瓦の窓をひらき心の泉をくみまきて十あまなりなしの
 文字の野風をはけみあへる輩也霜凍り冬とのしわれま
 せる夜この二三子席よ侍りて火桶よけし炭をおこす巷
 主これよ口をほとけ宋人の手龜らすといへる藥是あら
 んど玄のし折箸よ糖のさしやかなるを堅よをき横よな
 をしつゝ金屏の松の古さよ冬籠と舌よりまろひいつる
 聲のみたりか耳よ入さどくもうつるうのめ鷹のめとも
 の是よ魂のすいりたるけよやこれを思ひ立春の日のし
 つと出しより秋の月よかしらかたふけつしやし吟終り
 篇なりて竟よあめつちの二まきよわかつとなん是をひ
 らきひらきみるよ有聲の繪をあやどりおさむれい又く
 ぬき炭の筋みへたりけたしくも題號をかく付侍事は詩
 の正義よいへる五つのまなあるいやまどの卷々のたひ
 よいあらねど例の口よ任せたるよもあらず竊よより所
 ありつる事ならしひと日芭蕉旅行の首途よやつかれか
 手を携へて再會の期を契りかつ此等の集の事よ及てこ
 の冬こもりの夜さき火桶のよとよよりくぬき炭のふる
 歌をうちすしつるうつりよ炭たはらどいへるい俳也け
 りと獨こちたるを小子聞をりてよしとおもひうるど也
 此まうをえらふ媒と成よたりこの心もて宜しう序書て

ねこの子のくんつほくれつ胡蝶哉 其角
 うくひすにはうと息する朝哉 嵐雪
 鶯に薬をしへん 聲の文 其角
 うくひすの聲に起行雀哉 桃隣
 うくひすや門はたま〜豆麩賣 野坡
 鶯の一月も念を入にけり 利牛
 こねりをもへらして植し柳かな 湖春
 障子ぶし月のなひかす柳かな 素龍
 五人ふちどりてしたる、柳哉 野坡
 せきれいの瓦は見付さる柳哉 一風
 町なかへしたる、宿の柳かな 利牛
 傘に押わけ見たる柳かな 芭蕉
 土はこふ蘿にちり込椿かな 孤屋
 枝長く伐らぬ習を椿かな 湖春
 念入て冬からつはひ椿かな 曲翠
 鋸にからきめみせて花つはき 嵐雪
 鳥のねも絶す家陰の赤椿 支考
 はき掃除してから椿散にけり 野坡
 花
 うへの、花見にまかり侍
 しに人、暮打さはきも
 の、音小うたの聲さまさ
 まなりにけるかたはらの
 松かけをたのみて

ひしる敷へき喚續の春

我もらし新酒は人の醒やすき 嵐雪
 秋こそ寒しいつも湯嫌 越人
 月の宿書を引ちらす中にねて 全
 外面薬の草わけに行 全
 はねあひて牧にましらぬ里の馬 全
 川越くれは城下のみち 全
 疱瘡顔の透とをるほど齒の白き 全
 唱歌はしらす聲はそりやる 雪
 なみたみつはなれ〜のうき雲に 全
 後そひよへといふかはりなき 越人
 今朝よりも油あけする玉たすき 人
 行燈はりてかへる涙人 嵐雪
 着物を礎にうてど一脱 越人
 明日は髪そる宵の月影 越人
 しら露の群て泣ぬる女客 越人
 つれなの醫者の後姿や 越人
 ちる花に日はくるれども長咄 越人
 よふこ鳥とは何をいふらん 越人

初雪やここのひたる桐の木に 野水

てうくしくも響るかいわり
黒谷ののちは岡崎聖護院
五百のかけを二度に取けり
網ぬきのいばの跡ある雪のうへ
人のさはらぬ松黒むなり
雑得の鞍を下せば日かくれて
飯の中ある芋をはる月
漸と雨降やみてあきの風
鶏頭みては又射かく
奉公のくるしき顔に墨ぬりて
抱揚る子の小便をする
くはたくと河内の荷物送り懸
心みらるゝ箸のせんたく
増か来て娘の世とは成にけり
ことしのくれは何も曬はぬ
金佛の細きさどくをさするらん
此かいわいの小鳥みなよる
黍の穂は残らず風に吹倒れ
馬場の喧嘩の跡にすむ月
弟はとうく江戸て人になる
今に庄やのくちははとけす
賣手からうつてみせたるたゞき鉦
ひらりくと雪のふり出し
鎌倉の便きかせに走らする

嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡

かした處のしれぬ細引
獨ある母をすゝめて花のかけ
またかひ残る正月の餅

嵐雪 利牛 野坡

ふか川にまかりて
空豆の花さきにけり麥の縁
晝の水鶏のはしる溝川
上張を通さぬほどの雨ふりて
そとのそけは酒の最中
寝所に誰もねて居ぬ宵の月
とたりと塀のころふ秋風
さりとす薪の下より鳴出して
晩の仕事の工夫する也
姉をよい所からもらはるゝ
僧都のもとへまつ文をやる
風細う夜明からすの啼わたり
家のなかれた跡を見に行
鱈汁わかい者よりよくはりて
茶の買置をさけて賣出す
この春はどうやら花の静也
かれし柳を今におしみて
雪の跡吹はかしたる臘月
ふとん丸けてもおもひ居る

孤屋 芭蕉 水蕉 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡

上巳

あたりと花に五戒のさくら哉 其角
 花はよも毛虫にならし家櫻 嵐雪
 やまさくららるるや小川の水車 智月
 老僧も袈裟かつきたる花見哉 之道
 誰母そ花に珠数くる遅さくら 祐甫
 山櫻小川飛こすおなごかな 普全
 昆布だしや花に氣のつく庫裏坊主 利牛
 かちつさり魚やまかせや櫻かり 全
 折かへる櫻てふくや臺所 孤屋
 祭まてあそふ日なくて花見哉 野坡
 食の時みあつまるや山さくら 全
 帯はとに川のなかるゝ盪干哉 沾徳
 晝舟に乗るやふしみの桃の花 桃隣
 かつらきの神はいつれを夜の雛 其角
 鬼の子に餅を居るをひむな哉 如行
 日半浴をてられて来るや桃の花 野坡
 麻の種毎年 踏る 桃の華 利牛
 藪垣や馬の貞かくもゝの花 孤屋
 青柳の泥にしたるゝ盪干哉 芭蕉
 題しらす
 瀧つはに命打こむ小あゆ哉 爲有
 春雨や蜂の巢つたふやねの漏 芭蕉
 散残るつゝししの葉や二三本 子珊
 はうくどこみ燒門のつはめ哉 怒誰

旅行にて

鳥の行やけのゝ隈や風の末 猿雖
 氣相よき青葉の麥の嵐かな 仙華
 法度場の垣より内はすみれ哉 野坡
 此集いまた半なる比孤屋
 旅立事ありけるに品川ま
 てみ送りて
 雲霞とこまて行もおなし事 野坡
 梅さくららふた月はかり別れけり 利牛

首夏

夏部之發句

撫うをの裏はす日なり衣かへ 嵐雪
 衣かへ十日はやくは花さかり 野坡
 綿をぬく旅ぬはせはし衣更 九節
 雀上りやすき姿や衣かへ 雪芝
 花の跡けさはよほどの茂り哉 子珊
 扇屋の暖簾白し衣かへ 利牛
 卯の花やくらき柳の及ごし 芭蕉
 うのはなの絶間たゝか九圍の門 去來
 うの花に芦毛の馬の夜明哉 許六
 卯の花に扣ありくやつらかけ 支考
 題しらす

うの花

旅行に

棹の歌はやから涼しめじか舟 湖春
 髭宗祇池に蓮あるこゝろ哉 素堂

郭公

麥

端午

うくひすや竹の子藪に老を鳴
 聞までは二階にねたりはとくす
 はとくす一二の橋の夜明かな
 行燈を月の夜よせんはとくす
 柳灯の空に詮なしはとくす
 木かくれて茶摘も聞や郭公
 青雲や舟なかしやる子魂
 時鳥啼く風が雨になる
 子魂顔の出されぬ格子哉
 柿寺に麥穂いやしや作どり
 麥の穂と共にそよくや筑波山
 麥跡の田植や遅き螢とき
 翁の旅行を川ささまで送
 りて
 刈こみし麥の匂ひや宿の内
 おなし時に
 麥畑や出ぬけても猶麥の中
 おなしころを
 浦風やひらかる罫のはなれきは
 五月雨や傘に付たる小人形
 さうふ懸てみはやさつきの風の色
 五日迄水すみかぬるあやめ哉
 文もあく口上もなし粽五把
 みをのやは首の骨こそ甲なれ

芭蕉 桃隣 其角 嵐雪 杉風 芭蕉 素堂 利牛 野坡 荆口 許六

野坡 岱水 其角 酒堂 桃隣 嵐雪 仙花

涼

夏旗

五月雨

五月雨や顔もまくらもの本
 川中の根木によるこぶ涼かな
 月影にうこく夏木や葉の光り
 涼しさよ塀にまたかる竹の枝
 行燈をしいてとらすすみかな
 崎風はすくれて涼し五位の聲
 すしさをしれと杓の響かな
 すしさをや浮洲の上のさくらべ
 夕すしあふなき石にのほりけり
 三か月の隠にてすむ哀かな
 題しらす
 帷子のしたぬぎ懸る袷かな
 並松をみかけて町のあつさかな
 枯柴に晝顔あつし足のまめ
 二三番鶏は鳴ともあつさ哉
 はげ山の力及はぬあつさかな
 するか地や花たちはなも茶の匂ひ
 此句は島田よりの便に
 さみたれやとなり懸る丸木橋
 五月雨の色やよと川大和川
 さみたれに小鮒をにさる子共哉
 五月雨や露の葉にもる商陸
 この句は桃隣より書てこ

芭蕉 桃隣 其角 嵐雪 杉風 芭蕉 素堂 利牛 野坡 荆口 許六

野坡 岱水 其角 酒堂 桃隣 嵐雪 仙花

橋や定家杭のありどころ
 杉風
 駿斗むくや磯菜すし島かまへ
 正秀
 世の中や年貢島のけしの花
 里東
 早乙女にかへてどりたる菜飯哉
 嵐雪
 木曾路にて
 山吹も巴も出る田植かな
 許六
 ひるかはや雨降たらぬ花の顔
 智月
 はへ山や人もすさめぬ生くるみ
 北鯉
 曉のめをさめさせよはすの花
 乙州
 雨乞の雨着こはかるかり着哉
 丈艸
 燈みし雨の夕や水葵
 仙花
 一いされ蝶もうるつくわか葉哉
 楚舟
 なりかゝる蟬から落す李かな
 殘香
 猪の牙にもけたる茄子かな
 爲有
 團賣侍町のあつさかな
 怒風
 けうときは鷺の柄や雲の峰
 祐甫
 一枝はすけなき竹のわかば哉
 仙花
 竹の子や兒の齒くさのうつくしき
 嵐雪
 さるへさ人僕か酒をたし
 心事をかたく戒め給ひて
 詠せしむしかるにある會
 にそれをよく知てあられ
 あはもりなど名あるかさ
 りを取出てあるしせられ

名

改て酒に名のつくあつさ哉
 利牛
 ある人の別野にいさなは
 ければ汗をかきて
 れ終日打和て物かたりし
 其夕つかた外のかたをな
 かめ出して
 行雲をねてゐてみるや夏座敷
 野坡
 秋之部
 秋のあはれいつれか
 の中に月を翫て時候の序
 をはらはす
 名月や見つめても居ぬ夜一よさ
 湖春
 名月や襟取まはす黍の虚
 去來
 家買てことし見初る月夜哉
 荷兮
 名月や誰吹起す森の鳩
 酒堂
 松陰や生船揚に江の月見
 里東
 もち汐の橋のひくさよけふの月
 利牛
 家こはつ木立も寒し後の月
 其角
 むさしの仲秋の道はしめ
 て見侍て
 望峰不盡筑波を
 明月や不二見ゆるかどするか町
 索龍

茸狩や鼻のさきなる哥かるた
菊畑おくある霧のくもり哉
殊菊も色に呼出す九日かな
杉風

秋植物

柿のなる本を子どもの寄とこる
落栗や谷になかる、蟹の甲
秋風や茄子の数のあらはる、
箕に干て窓にとちふく綿の桃
利牛
木白
孤屋

とうからしの名を南蠻からしと
いへるはかれか治世南はんにて
ひさしかりしゆへにや 未詳はう
つき天のをきそら見八ツなりな
といへるはをのかゝたらをこの
める入るのもてあそひて付たる
なるへしみなやさしからぬ名目
は汝かむまれ付のふつゝかなれ
は天資自然の理さらゝ恨むへ
からすかれか愛をうくるや石臺
にのせられて竹椽のはしのかた
にあるは上々の仕合也ともされ
はすりはちのわれそこぬけの釣
へに土かはれてやねのはつれ二
階のつを物はしのひかけをたの
めるなどあやうくみへ侍を葬の

はかなきたくひにはたれもゝ
おもはず大かたはかつら髻つり
鬚のますゝおにかしつかれてひ
んは樽の口をうつすみさかなと
なり不食無菜のときふと取出さ
れおけくはやつこ豆麩の山紅葉
の色をみするを榮花の頂上とせ
りかくはいへとある人北野もう
ての歸さにもちのはどりの小童
にこかね一兩くれてなんちか青
くゝとひとつみのりしを所望せ
しことありといへはいやしめら
るへきにもあらずしかしいまは
その人ゝも此世をさりつれば
いよゝ愛をもたのむへからす
からさめもみすへからすと小序
をしかいふ

石臺を終に根こきや唐からし
野坡

題しらす

相撲取ならふや秋のからにしき
水風呂の下や案山子の身の終
礎ひどりよき染物の匂ひかな
秋のくれいよくかるくなる身哉
茸狩や黄豊も兒は嬉し顔
嵐雪
丈草
洒堂
荷兮
利合

夕貞の汁は秋しる夜寒哉 支考
くる秋は風ばかりてもなかりけり 北枝
秋風に蝶やあふなき池の上 依々
庖丁の片袖くらし月の雲 其角

冬之部

風や沖よりさむき山のされ 其角
市中や木の葉も落すふし風 桃隣
冬枯の磯に今朝見るとさか哉 芭蕉
櫻木や菰張まはす冬かまへ 支梁
刈蕎麥の跡の霜ふむ雀哉 洞實
風の藪にとくまる小家哉 殘香
初霜や猫の毛も立臺所 葉舟
風や珍しけき猫の面 八桑
即宮山に詣て
木枯の根にすかり付檜皮かな 桃隣
箒目に霜の蘇鉄のさむさ哉 游刀
芋喰の腹へらしけり初時雨 荊口
黒みけり沖の時雨の行どころ 丈草
芭蕉翁をわか茅屋にまね 草
さらぬほど今日は時雨上草の菴 斜嶺

在明となれば度くしくれ哉 許六
旅ねのころ

小夜露となりの日は挽やみぬ 野坡

大根引といふ事を
鞍壺に小坊主乗るや大根引 芭蕉
鉢まきをとれば若衆を大根引 野坡
神送荒れたる宵の土大根 酒堂
人聲の夜半を過るさむさ哉 野坡
この比は先挨拶もさむさ哉 我峰
蕎麥切に吸物もなき寒さ哉 利牛

足もともしらけて寒し冬の月 我眉
魚店や蕤うち上て冬の月 里東
右の二句はふか川の庵へ
をとつれし比他國よりの
状のはしに有つるをみて
今爰に出しぬ

はつ雪にとなりを顔て教けり 野坡
初雪の見事や馬の鼻はしら 利牛
はつ雪や癖の崩れの蕪の上 買山
雪の日に庵借を鰯鰯 依々
雪の日やうすやうくもるうつし物 猿雖
冬の夜飯道寺にて
杉のみの雪臘之夜の鶴 支考

それはいかいの道はとほく千重の涙を更け
て崑山の玉をひるふにもあらずはるるに
かれのいさこそこえて靈山のたからをも
むるにもあらずたゞ我秋津洲のくにいつ
ふるかあつよそしあまりをいてすしてよ
つのさるいにいたれるわさなりけらし
はあれとまことよそのみなもとをしり
き心をくまんことはいそのかみふりに
世に枝の雪をならしまとの螢をむつひぬ
人もかたくなむ侍りさまして神杉のす
よとなりてたつきなきともからに何か
翁くれかしのいらつめなどいいてわた
草となせるよりそおのつらかしこきも
くなかるへしこのみちのひしりてふも
書おける七ツのふみを一まきとなして
やすくその奥儀をしらしめんと世に行ふ
のならし

大鵬館主人かいふ

安らげく永き三ツのとし

長月の比

明治三十三年十月五日印 刷

明治三十三年十月八日第八版發行

發行者 中村芳松

大阪市南區末吉橋通四丁目八十九番屋敷

大阪市南區鹽町通三丁目六十九番邸

發行者 中村寅吉

大阪市南區鹽町通四丁目百六十七番邸

印刷者 大垣彌太郎

大阪市南區心齋橋北詰

發行所 中村鍾美堂

東京市日本橋區本銀町三丁目二番地

發行所 鍾美堂支店

大阪市南區安堂寺橋通四丁目

印刷所 鍾美堂第二活版部

